

【論文】

## 哲学と時間 ベルクソン『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義1902-1903年度』合評会

藤田尚志<sup>1</sup>・鈴木 泉・納富信留・平井靖史

以下は、ベルクソン『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義1902-1903年度』日本語版（藤田尚志・平井靖史・岡嶋隆佑・木山裕登訳、書肆心水、2019年）の刊行を記念して開催された一連の合評会のうち、2019年9月6日に学習院大学で開催された第1弾の記録である<sup>2</sup>。伝説の名講義として名を馳せたこの講義は、格好のベルクソン哲学入門であると同時に、「哲学史とは何か、どうあるべきか」という観点からも興味深い数多くのアイデアを宿している。その射程を余すところなく展開すべく、古代哲学（とりわけプラトン）と近世哲学（とりわけスピノザ、マルブランシュ）の代表的な研究者である納富信留氏（東京大学）および鈴木泉氏（東京大学）を登壇者に迎え、旧来のベルクソン研究あるいはフランス哲学研究の枠を超えた哲学討議を行なった。当日は質疑も含め、時間観念とその歴史をめぐる活発な議論が展開されたが、紙幅の関係で会場とのやり取りは割愛せざるを得なかった。

### イントロダクション：講義の意義・経緯 藤田尚志

○藤田 ベルクソンのコレージュ・ド・フランス講義が初めて日本語に翻訳されましたので、その刊行を記念して合評会を開催することに致しました。学会のイベントとしてお認めいただいた日仏哲学会、また会場を提供してくださった学習院大学の杉山直樹先生には篤くお礼を申し上げます。

さて、今回刊行された『時間観念の歴史』をはじめとする一連のコレージュ・ド・フランス講義は、これまでに日本語でも刊行されてきたベルクソン講義録とはかなり性質を異にするものです。というのは、これまでの講義録が主にリセの生徒のノートを起こしたものであったのに対して、このコレージュ・ド・フランスの講義録はシャルル・ペギーが速記者に速記させたもの、いわばライブ盤のようなものであって、ベルクソンの言葉がかなり忠実に再現されたものになっているからです。これは、お読みいただいた方には本当にリアルに実感としてわかっ

ていただけたと思います。そういう意味で、われわれベルクソン研究者にとってはきわめて貴重なものであり、その翻訳の刊行を非常に喜んでいるのですけれども、ただ現代の哲学研究の水準から考えて果たして価値があるのか、現代的な観点からしても、もう一度考察するに足るような内容を備えているのかどうかということはまた別問題です。

この『時間観念の歴史』は、最初の四講（1～4講）が方法論的なイントロダクションに割かれた後、第一部とも言うべき前半部分の十講（5～14講）が古代ギリシア哲学史の叙述にあてられ、第二部とも言うべき後半の五講（15～19講）が近代哲学史に関する部分となっております。そこで本日はお二人の実に頼もしい助っ人をお願いをして、このベルクソンの講義録を読み解いていただこうと思っております。お一人目は東京大学の納富信留先生です。もちろん言わずと知れたプラトン研究の第一人者ですけれども、その納富先生に、まずはこのベルクソンの講義録の前半部分、古代哲学に関する部分の読解をお願いしております。お二人目は、やはり東京大学の鈴木泉先生です。こちら、デカルト、スピノザから始まって、現代フランス哲学にまで至る幅広いご研究で高名な研究者です。鈴木先生には、後半の近代哲学に関する部分の読解をお願いしたいと思います。では、早速ですけれども、納富先生、よろしくお願い致します。

## セッション1. 納富信留：古代哲学史に遡る形而上学

○**納富** ただいまご紹介いただきました納富です。私は古代ギリシアが専門で、ベルクソンについてはごく普通の哲学の学徒として、以前からそれなりに少し親しんでいる程度です。多分、きちんと理解してないところが多いと思います。今回、藤田さん、平井さんはじめとする皆さんの素晴らしいご翻訳を読ませていただきましたが、原著に当たったり、ベルクソンの他の著作と照らし合わせるといった作業を行なっておりませんので、おそらく、私の言ってることで少しずれているとか、あるいは正しいインフォメーションが必要といった点もあろうかと思えます。そこはぜひご指摘、ご教示いただければ幸いです。ギリシア哲学についても、特にプロティノスについてベルクソンが詳細に議論している部分は、すべてを詳細に検討するのは難しいです。今日は、主にベルクソンが前半の10講でギリシア哲学を講義している部分について、私の方で気づいた点や気になる論点を提示して、あとで議論の素材にしたいと思います。おそらく、質疑応答の時間に皆さんのほうで、ベルクソンの議論や背景について多くのご質問をいただけたと思います。それらについて、その都度何らかのかたちでお答えできると思いますので、ギリシア哲学に関して気になってる箇所がありましたら、積極的にご質問ください。もしその場で答えられない場合は調べてお答えします。

## 1. ベルクソンのギリシア哲学講義

ベルクソンにはコレージュ・ド・フランスでの講義がいくつかあるようですが、この講義録が邦訳されたのは非常にすばらしいことだと思います。最近、フーコーの講義録もずいぶん日本語訳で出ており、私も2、3目を通して議論に使ったりしておりますが、同じコレージュ・ド・フランスで行ったものですね。それから、デリダの2000年代の講義録にもいくつか非常に精密な翻訳が出ています。それらの講義録にはこれまで知らなかったさまざまな側面が出ていますので、時代が経るにつれ、公刊著作だけでなく講義録自体を読めるようになって、裏の事情がよくわかるようになりました。私は、ベルクソンにこんな講義があったことを、実は知りませんでした。フーコーやデリダに比べると1世紀ほど前のものではありませんが、同様にベルクソン研究にとって大きな進展をもたらすものと期待しています。ベルクソンの著作を読むとギリシア哲学への言及がしばしばあり、プロティノスの読解や、プラトンに対する批判も出てきますので、高い見識を持っていたことはよくわかるのですが、どれぐらい自分で読んだり研究したりしていたのか、どれほど深刻に扱っているのかは、著作をざっと読んだ限りでは必ずしもつかめないところがありました。それゆえ、この数年間の講義録が出てくると、そういった裏事情、つまりベルクソンのギリシア哲学との関係が明らかになってくると思います。この主題については私よりも、そういうご研究を行っている専門家がいらして、ご論文もいくつか出ていることは承知しております。今さら私が言う必要もありませんが、ギリシア哲学とベルクソンとの関係について、このような講義録を中心にして新しい視点が出てくることは大いに期待しています。

その場合、大きく2つの観点があります。まず、ベルクソン哲学にとって、そのギリシア哲学を取り扱うことがどのような意味を持っていたのかという点です。つまり、ベルクソンが自分で作っている哲学の図式をたんに古代ギリシアに投影して「いいところ取り」をしているのではないかという疑念に対して、慎重な検討が必要です。ベルクソンに鼠兎をしようがしまいが、この問いにはイエスカノーかを言わなければなりません。無論、できれば我田引水ではないと思いたいわけですが、ベルクソンにとってギリシアを論じる意味がどこにあるのか、これが私の一番の関心事です。第二に、逆に、ギリシア哲学の研究にとってベルクソンの言っていることがどのくらい意味があるか、という観点もあります。つまり、彼の切り込み方、彼の見方が、従来私たちが捉えているギリシア哲学像に対して、どのような哲学的示唆をもたらすかということです。それは最初の観点と裏表の関係にあると思いますが、この問題についても多少なりともベルクソンの独自性が示せたらと思っています。

ベルクソンは、解説で詳しく書かれているように、コレージュ・ド・フランスで1900年から1904年までの間、毎年、プロティノスやアリストテレスらを演習で取り上げて議論しています。

1902-3年度の講義はプラトンからプロティノスまでを一連の流れで取り上げている点で、まとまったギリシア哲学講義と言えます。この時期の前後はどうだったのか、私は知りませんが、もう少し前に準備していた時期とか、そのあとで展開した時期とかもあるかもしれません。今回はこの講義に限ることにしますが。私の基本的な疑問は、時間の観念の歴史を辿るという、この講義のテーマで、古代ギリシアを取り上げる意味がどこにあるのか、ということです。つまらない答えとしては、ベルクソンがコレージュ・ド・フランスの「ギリシア・ローマ哲学講座の教授」になったから、ということでしょうか（笑）。そういう講座で教えるので、当然、講義はギリシア哲学をやらざるを得ない、そんな答えもあり得ると思います。のちに近代哲学を中心にするベルクソンですが、この時期は自分のポスト上の要請で集中的にギリシア哲学を検討したということ、これは多分、別に否定することもないと思います。ですが、それが唯一の答えだとするとつまらないので、なぜ、この年に、つまり非常に脂が乗り切った年に、19回の講義のうち（プロティノスまで入れると）10回をギリシア哲学の講義に当てたのかという疑問に、まじめに答えていきたいと思っています。

### 「知性主義の源」としてのギリシア哲学という読解

ベルクソンの哲学史の見方からすれば、ギリシア哲学は知性主義の源です。つまり、ギリシアから始まった哲学の知性主義が時間についての持続の観念を覆ってきた、というのが公式の見方になります。特に「概念化」とか「空間化」と言われる動きは古代ギリシアに始まり、近代、現代までつながっているというのが、ベルクソンの基本的な見方だと思います。そうだとしたら、わざわざ、なぜギリシアを取り上げるのかというのが基本的な問題です。つまり、批判する相手を、なぜこれほどの分量で論じているのか、そこに何を見ようとしているのが疑問です。これは駄目だという結論なら、それで終わってしまうのではないかと、まず素朴に思います。

例えば、ベルクソンはこう論じています。時間を諸概念によって表象に閉じ込めよう、従属させようとする試みが「変化そのもの、持続を、概念的に表象できるようになるのか」という最大の問題に遭遇させた（87頁）。また、「全古代哲学は、実在を概念のうちに、時間の外に探さなければならないという原理に基づいている …時間とは永遠の展開に過ぎず、概念の不動性の展開でしかないという帰結が出てくる」（247頁）という具合です。つまり、ギリシア哲学の全体を見渡したうえで、ベルクソンが否定したい見方、つまり、動的な持続を不動のものとして捉える概念化や不動性を確立したのはギリシア哲学だ、という話になるのです。そうして、目指される時間論は「全古代哲学が向かわせる結論とは逆の結論にむかう」（254頁）と断定されます。しかし、これではギリシア哲学は否定される論敵で終わってしまうので、失敗した先

駆者を一生懸命取り上げるのはどういう意義があるのかが、どうしても引っかかる疑問です。思考実験で、仮にベルクソンがギリシア哲学を一切使わずに自分の時間論を展開していたらどうなっていたかを想像すると面白いでしょう。その場合、ギリシア哲学を失敗例として脇に置いておいて、持続という概念を十分に提供できるのかというのが一つの問題です。もう一つは、知性主義が現代の私たちも囚われている一つの謬見だとして、それを正すことがギリシアに遡らずに可能かが問題です。この問いにイエスとノーで答えるとどうなるでしょうか。イエスだとして、もしギリシアは単なる枕だということになると、現代の時間論だけで十分、あるいは哲学史の検討はなしでも構わないという答えになります。反対にノーだとして、もし歴史的な反省を通じてのみ正しい見方を回復できると考えるとすると、ギリシア哲学は必須の検討課題になります。ベルクソンはギリシアを本格的に論じており、私としては後者の選択肢で読めるのではないかと期待しつつ、ベルクソンのギリシア哲学論を見ていきたいと思っています。

#### ベルクソンのギリシア哲学史観の四つの特徴

次に、ベルクソンが講義の前半部で行っているギリシア哲学の検討について、大まかに特徴として4点を挙げてみます。第1に、「時間」論そのものより、その基盤にある存在論・認識論に注目している。第2に、古代ギリシア哲学の流れを、一つの全体として捉えている。第3に、ギリシア哲学の扱いに偏りがある。具体的には、初期ギリシア哲学はゼノンのみで、プラトンも『ティマイオス』の一部に限られる。アリストテレスの「時間論」は必ずしも標準的な扱いを受けておらず、プラトン『ティマイオス』時間論の展開として理解される(119-20頁)。また、プロティノス哲学の重視です。そして第4に、顕著な欠如として、アウグスティヌスへの言及がない点が気になります。これらの点を検討していきます。

まず驚くのは、「時間観念の歴史」という表題にもかかわらず、時間論自体を正面から扱っているようには見えないことです。むしろ、その基盤にある存在論や認識論をターゲットにしています。いや、狭い意味で「時間」という観念だけを検討するのではなく、もっと大きなプロジェクトになっています。必ずしも「時間」という言葉が出てこない部分を含めて、いったい、私たちが抱く「時間」の問題枠組みをどう捉えるべきかという、そういう検討になっているというのが、全体の印象でした。第2は、古代ギリシアの哲学の流れを一つの全体として捉えるという点です。その見方は強烈であると同時に、様々な点でミスリーディングだとは思いますが、ベルクソンの議論の特徴ですね。では、そのギリシア哲学自体の扱いはどうなっているかという、あちらこちらに偏りがあるということは明らかです。初期ギリシア哲学はほとんど無視して、ただし、ゼノンのみ扱うという態度です。ゼノンの扱いについては後で問題

にします。プラトンについてもいろいろなことを少しづつ言ってはいますが、基本的には『ティマイオス』しか扱っていない点も特徴です。プラトンの対話篇で本当に「時間」を論じているのは『ティマイオス』の宇宙制作論のごく短い一節だけなので、そこを使うのはまったく正当なのですが、プラトン哲学を見るのにそこだけで良いのかというと、私は疑問を感じます。さらに特異なのはアリストテレスの時間論の扱いで、これも標準的な議論だとは思えません。「アリストテレスの時間論」ということで、哲学史や論文を引くと、全然違う議論を紹介しているのは皆さんご存知の通りです。つまり、時間とは「今、今」と続く運動の数であるという、あの『自然学』の定義をベルクソンはほとんど無視して、場所論との比較で全部議論を進めており、かなり特色のある時間論だと感じます。もちろん、講義という枠がありますし、聴衆の知識を前提にしているので、その点の考慮は必要です。そして、プロティノスの哲学を非常に重視している点、これは積極的な特徴だと思います。こうして、全体としてはプラトンの『ティマイオス』からアリストテレス、プロティノスを一つの同じ路線を突き詰めた、展開した流れと捉えていて、哲学史として言えば、ややヘーゲル的な感じがします。あるいは、プラトニズムの中で一つにまとめているという、強引さが特徴になっています。

顕著な欠如もいろいろあります。時間論を論じる場合、通常はまずアウグスティヌスが登場して、アリストテレス対アウグスティヌスという議論になりますが、それが一言も出てきません。名前も出てこなかったと思いますが、このあたり、どう考えるかは気になります。他にも古代・中世で言及したほうが良いと思われる哲学者はいますが、ざっくり無視されています。ということで、繰り返しますが、講義という制約があるにしても、時間論の歴史として見た場合はかなり特異な感じがします。

### 哲学史の方法論

次に、哲学史の方法論について検討しましょう。では、どうしてこのような哲学史を論じるのかは、第14講の234-235頁にこうあります。「哲学的問題の多く、哲学において克服不可能であるとさえ思われている困難の多くは、事物の本性、ひいては人間精神の本性にさえ起因しているわけではなく、むしろある種の偶然的な状況に、すなわち歴史の中で人が問いを立て解決するに至ってきた仕方に起因する」。また、「困難は、事物の本性やわれわれの精神の本性ではなく、問題の立て方に起因する」。つまり、哲学的な問題、プロブレムは実は問いの立て方に起因している、だから事物の本性から問題があったというよりは特定の扱い方によって問題が生じている、という基本的な見方です。それゆえ、そういった問題の解決は、こうなります。「ある問題の来歴を歴史的に説明すること、いかにして人が問題のある特定の形式で立てるに

至ったのか、その形式で問題を立てているからこそ、解決が困難でいわば不可能なものとなっている次第を示すこと＝問題の来歴を歴史的に説明すること、これはほとんど問題を解決すること」です。ある問題の来歴を歴史的に説明することは、そのまま解決につながります。そうだとすると、時間についての間違った見方、つまり知性主義的な、空間的な概念化された時間の捉え方の来歴を辿ること自体が、解決への道になる、これがこの議論の方法論です。

この方法論は、例えばウィトゲンシュタインと比べると面白いでしょう。ウィトゲンシュタインは、哲学の問題は私たちの言語の誤った使用に基づくと考えて、その解決はハエトリ壺の出口をハエに教えるようなもので、問題自体は消えてなくなると考えました。ウィトゲンシュタインにとって哲学は、「はしご」のように、それを使って登ったら必要なくなってしまうようなものとしてあるわけです。では、ベルクソンはどこまでこれに近いでしょうか。はたして、誤りの原因が自覚されて取り除かれたら問題はすべて消えてなくなってしまうのでしょうか。しかし、ウィトゲンシュタインとベルクソンには距離があるようにも感じます。もう少し慎重な検討が必要でしょう。

また、ハイデガーとの対比は、藤田さんが最後の解説で書いていますが（431-434頁）、似てるどころと違いもいろいろあると思います。ただ、全体として共通性が大きいと感じさせるのは、時間の概念を歴史的に遡ることによって、私たちの現代の見方を古代に遡って一旦解体して、そこからもう一回取り出して戻ってくるやり方です。そのような共通性は、もちろん二人の間の影響関係とかではなくて、哲学の方法論としての類似性であり、同時代で共通するプロジェクトなのかもしれません。そして、この共通性について、最初に提起したように、ギリシア哲学をなぜ論じる必要があるのかという問題に戻ります。ただ単に自分の理論を過去に投影したり、ギリシアが共通の文化基盤だからというのではなく、古代ギリシアに遡るのは、哲学史の再検討が問題の解決につながるという信念があったからだだと思います。ベルクソンやハイデガーの哲学においてギリシア哲学史がどう効いているか、比較で検討するのは興味深いと思います。

### 別の可能性に向けた遡行

私にとって特に面白かったのは、後半の317頁、近代のところに出てきた、二つの道への分岐という話です。プロティノスからルネッサンスを経て近代にいった場合に、二つの道があって、自分たちはこちらの道を進んできたけれど、あちらにも道があった。そちらにもちらちらと目を向けて、実はそこに行き着く先もあったという、そういう説明が出てきました。あちらにあった第1の道とは、全く純粋な持続の直観とその掘り下げの方法へとますます向かっていく道のことです。これはベルクソンが本来とるべきだと思っていた道ですが、実際は近代の哲学はそ

こちらに進まなかったのだと論じています。こちらにある第2の道は、普遍的で唯一の統合された学を打ち立てることで純粹持続を次第に見失う道で、近代哲学はその道を進んできたと言えます。しかし、道が二つに分かれる前、最初には選択肢があって、その根は一つだったという表象です。私たちの哲学は全体として「動き回る持続」へ進むことも可能であった。そのような歴史の捉え直しにおいて、むしろ第1の道をたどって、純粹持続を回復することの意味が問われます。その時に、少なくとも今、この道の表象で言うと、古代ギリシア哲学に戻ることによってどんな道があり得たのかを探ることになるのです。そうすると、必ずしも先ほど言ったように、ギリシア哲学が結局は「概念化や空間化」で駄目だったと言い切って退ける態度ではなくなります。ギリシア哲学は、常に全員が第2の道だったというわけではないのです。つまり、ギリシア哲学そのものは第1の道と第2の道に進む両方の、潜在的な選択があったにもかかわらず、というか、そのギリシア哲学に内在するある種の導因が第2の道のほうにより強くシフトさせてしまったというのが、ベルクソンの歴史観なのでしょう。その導因は幾何学をモデルにするプラトン主義の伝統でした。そうだとすると、ベルクソン自身はギリシアに遡ることによって第1の道を取り戻すという、そんな哲学史の使い方をしてるのではないか、そういう見通しで私はこの講義録を読みました。以上が、全体の枠組みについてです。

## 2. 「完全者の縮減」という古代時間論

実質的な内容に入りますが、ギリシア哲学の時間観念をベルクソンが全体としてどう捉えているかという、それは何度も繰り返しているのが明らかでしょうが、完全なものからいわば引いていく、本書で「縮減」と訳されていますが、差し引きという見方です。「一者」が完全なものとしてあり、徐々に光が闇のほうに移る、暗くなるのと同じように、完全性が少なくなってくる。そこで、少なくなってきたところで時間が発生するのです。さらに言うと、「完全者」というものは時間を超えた永遠です。その永遠がこの世界に実現するときに、減ることによって時間が生まれてきた。これがプラトンからプロティノスまでの一貫した古代の時間論であるという、大きな図式です。ベルクソンはこの見方を証明したうえで、近代の話をして、さらにそれをひっくり返す自分の純粹持続という考えを打ち出していきます。ここで検討したのは、古代についての彼の見方が正しいかどうかです。

### ギリシア哲学史の新プラトン主義的理解

さて、ベルクソンのギリシア哲学史観ですが、現代から見るとかなり特殊だと思われるのではないのでしょうか。いろいろと考察の余地がありますが、まずは、プラトン、アリストテレス、



プロティノスを一体に捉えるという図式です。これは素直に認め難いと思う人も多いでしょう。つまり、この3人では全然違うという感想もあれば、彼ら以外にもたくさんいるという見方もあるでしょうし、どうしてこの3人なのかという疑問もあるでしょう。一番単純な理由は、この3人にだけ全ての著作が残っているということでしょうか。ベルクソンは184-185頁でそんな理由を述べていますが、それでは説得力がないと思いますよね。それを言えば、他の人たちは資料が残ってないからギリシア哲学に入れません、といった論理になってしまいますから。著作の点を除いたとしても、恐らく、ベルクソンはこの3人がギリシア哲学で現代につながる一番の王道を築いたラインだと考えたのでしょう。プラトン主義と呼ばれるラインです。ですから、これはあえて言えば、新プラトン主義的な哲学史観だということになるでしょう。現代の日本や英米での哲学史でこういう風に見える本はほとんどありませんが、20世紀の前半から中盤にかけては時々あったようで、ちょうど井筒俊彦の『神秘哲学』という本は、全くこのとおりの図式で、プロティノスがプラトンとアリストテレスを完成したと論じています。アリストテレスはまさにプラトン学徒だったという、ベルクソンと同じ図式なので、恐らくプロティノスを中心に据える哲学史の伝統が20世紀前半にあり、3人の哲学者をこういうかたちで並べていたのかもしれませんが。ベルクソンの影響かもしれませんが、そうでなくても構いません。恐らくかつてこういう哲学史観があったのに、現在はそれはほとんど否定されている、いや、そもそもそんなものを聞いたことがないという人が多いと思います。ですから、これは必ずしもベルクソン一人の特異な現象ではなくて、20世紀の前半にあったのではないかと私は考えています。そして、この3人が一つの思考を発展させ、この辺はややヘーゲル的な感じがありますが、ただしそれぞれが独自であったという、ある種の発展的図式で捉えているようです。

この3人に絞って古代哲学を捉える歴史観が正しいかと言えば、当然、古代哲学としては狭すぎると言いたくなります。いくつかの問題がありますが、初期哲学、つまりソクラテスとそれ以前の時代をほぼ完全に無視しています。彼らは時間についてはあまり議論していませんでしたとベルクソンは言っていますが、果たしてそうでしょうか。例えば、最初期の哲学者アナクシマンドロスの断片には、無限からの事物の変化について「時の秩序に従って」という文言があり、宇宙の生成消滅において時間が果たす役割が認められていました。そのように、ソクラテス以前でも素材はいくらでもあります。その意味では、ベルクソンは意図的に無視しているのでしょう。ヘレニズム時代のエピクロス派、ストア派のような物質主義もほとんど無視しているので、基本的には超越イデア的、プラトン主義という路線のみに焦点を当てていることになります。これが非常に偏っていることは間違いありません。当然かもしれませんが、懐疑主義も無視されています。そうして出される「ギリシア哲学の全体は、その始まりから終わ

りに至るまで、一つのものであり、この統一こそが、真理の徴しだ」(189頁)という見方は強烈ですね。他の哲学者たちは意味がなかったことになってしまうので、私としては言いすぎだと思いますが、そういうかたちでベルクソンは自分の立ち位置を、古代ギリシア哲学の「時間は永遠の展開である」という原理から見定めようとしているのです。

一例では、ヘラクレイトスとベルクソンの関係が私には気になります。ベルクソン本人に尋ねたら、つながりは否定はするだろうと思いますが、プラトンが生成消滅を知性主義的に捉えたのに対して、ヘラクレイトスの流動主義はアンチとなりますので、ベルクソンの立場に共通すると思っています。歴史的なヘラクレイトスでなくても、ヘラクレイトス主義についてもう少し考察してほしいと思いました。それで、「縮減」や「諸イデアの階層化、序列」(166頁)として全体を捉える見方だけが論じられます。この統一から時間における展開が出てくるという議論(185頁)は非常に強い見方なので、当然のことながら、この講義通りにギリシア哲学を理解するのは無理ですね。あくまでもベルクソン哲学の生成の現場で、彼が目にしたギリシア哲学史というふうに理解していくべきでしょう。要するに、哲学史の叙述としては問題が多いという感じでしょうか。

### ゼノン解釈をめぐる

次に、ゼノンに関してです。私はきちんと調べていませんが、ベルクソンの著作にゼノンはかなり出てきているはずなので、彼の議論の扱いが時期によって変化しているのか、そのあたりは興味があります。ベルクソンはゼノンにおおいに注目し、四つの逆説を分析して、それをアンチテーゼに使いながら知性主義の問題を分析しています。その意味でゼノンは決定的に重要なのですが、その使い方については再び疑問がでできます。山川偉也さんが『ゼノン 4つの逆理』という本でベルクソン批判をしています。ゼノンの議論は多元論者や運動論者への批判であり、一旦彼らの前提に立って論じているが、それは否定のためであってゼノンはむしろ非常にベルクソンに近かったのだと、そういう議論をしています。ゼノンの四つのパラドックスは「二分法、飛ぶ矢、アキレス、競技場のパラドックス」です。それらは多元論を論駁するための帰謬法であって、その議論をゼノンは正しいと提示しているのでは全くありません。つまり、あなた方はこういう前提に立って空間や運動を考えていますよね、だからうまくいかないんです、というように、相手の議論を提示してやり込め、自分はその反対を主張しようとしているのです。ベルクソンは「運動のうちにでなく、空間のうちに、時間のうちにでなく、空間のうちに身を置くと、ゼノンは完全に自分の仮定の論理の中にいます」(103頁)と言いますが、こういう言い方は果たして正しいのでしょうか。つまり、ゼノンが時間の空間化したのかということ、ゼノン自身を見た場

合には山川さんのように、いや、それは違う、と言いたくなるのではないのでしょうか。むしろ、ゼノンはまさにベルクソンが指摘するように、空間化、概念化の捉え方が非常に大きな問題を含んでいることを示し、あなた方の論理ではうまくいきませんよと、論敵に突きつけているのです。では、それによって出てくる反対の立場が何かというと、ベルクソンはまったく議論していませんが、パルメニデスの「一あり」という立場なのです。無論、この「一あり」という立場は、運動を否定している、また不動であるとして、ベルクソンは退けるでしょうが、実はプロティノスの「一者」に全く共通するものです。プロティノスとはときどきパルメニデスに言及して自身の思索を展開しますので、実はプラトン、アリストテレス、プロティノスの3人というよりも、その前にパルメニデスを置いてラインを結ぶべきだったのです。ゼノンが提示した議論がまさにパルメニデスを擁護するためだったと考えると、ゼノンがギリシアの知性主義の代表だから間違っている、だからギリシア哲学は間違っていたという見方は成立しなくなります。しかし、ゼノンについては既にこの講義の前に大いに議論しましたとベルクソンは断っているのです、この論述だけでこれ以上議論するのは難しいとは思いますが。

### プラトン解釈をめぐって

いよいよ、プラトンについてです。私にとっては非常に興味深いのは、ベルクソンのプラトンに対するアンビバレントな立場です。つまり、基本的にベルクソンは、プラトンが運動を固定化し、アイデアや概念において持続を固定化し、知性主義で切り刻むといった批判を絶えず加えるのですが、そういった公式の、表看板としての「反プラトン」と比べると、この講義録で示されるのは実は非常に根強いプラトン主義の側面です。「新プラトン主義」ではないところが重要で、やはりこれは「プラトン主義」です。ベルクソンもはっきり言っているように、プロティノスとプラトンを区別してプロティノスはいいがプラトンはいけない、とは言っていないのです。むしろプロティノスはプラトンを純粹に発展させたと考えているわけで、それで言うと、プロティノスも含めたかたちでのプラトンに対して、ベルクソンは果たしてノーと言いつけるのか、あるいは、先ほど言ったように、プラトンまで遡ってきた時に何か別のものが見えているのかという点で、非常にアンビバレントなところがあると思います。私は、今回考えてきて正直わかりませんでした。アンビバレントという感じは最後まで非常に強く残りました。この点で、ハイデガーとの違いについては、藤田さんが433-434頁で説明してくれています。ハイデガーは、プラトンは偉大だがそこから存在論の誤りが始まってしまったとして、プラトン以前、つまり、パルメニデスとかヘラクレイトスに戻るわけですね。それに対してベルクソンは、プラトンにおける間違いというものをプロティノスのほうに時代が下ることによって解消しようとしているようで、ここも面白い

と思いました。正確に比べられるかわかりませんが、歴史観が正反対になっているのです。

プラトンのイデア論の基本理解については、私は、正しくてとても良いと思っています。118頁でこういうことを言っています。通常、研究者が問うような「どうしてイデアが存在するか」は全く問題ではない、むしろ「イデア以外のものがどうして存在するか、どうやって出てくるか」、これが哲学的な問題であり、プラトンの問題だと非常にはっきり言っています。当然、当時のプラトン研究者たちに向けて発言しているのですが、今でもすっかり当てはまるといえるのか、今のほうがよりいっそう当てはまる正しい見方であり、私は全面的に賛同します。どういうことか言うと、私はイデアを論じる時にいつも言っているのですが、現代のプラトン研究は基本的に英米系の経験主義、アリストテレス的な経験主義が強い基盤となっており、プラトンのイデアに対して、「この世界だけで十分なのに、どうしてイデアのような不要なものを立てる必要があるのか」という問いから始めるのです。そうすると、イデアなど余分だと、オッカムの剃刀で切り捨てることになります。最初からイデアなどという存在がない世界で完結してののに、そこでイデアがなぜ必要なのかと、そういう問われ方をしたら、もう初めからイデアなどわからないし、プラトンの意図もまったく理解できるはずがないので、ほぼ不毛な問いだと見なされてしまいます。それに対して、ベルクソンはそんな問いがプラトン哲学で問題になるとは考えていません。彼はこう考えます。イデアから始めて、イデアがこの世界に対してどのように関わってくるかという、そこがプラトンにとって問題だった。しかし、プラトンはそれをうまく説明できなかつたし、アリストテレスはもうすこし頑張ったけれどやはり不十分だった。それに対して十分な議論を与えたのはプロティノスだということになる。そういうストーリーなのでですね。この見方は魅力的で、私も確かにこれが問題だと思います。プラトン自身、たぶん最後までそれが困っていた問題だと思いますので、そういうところはベルクソンの解釈に賛同します。ただし、プラトンの教説の限界を神話性に帰しているところには問題があります。この講義のそこだけを取り上げて批判するのは失礼かもしれませんが。プラトンは『ティマイオス』において、確かに「神話」という単語を使っています。有名な「エイコース・ミュートス、ありそうな物語」という表現で、ティマイオスが語る宇宙論はある意味ではミュートスなのだと言っています。時間論もそのミュートスの一部なのです。その意味で言うと、プラトンは最後までミュートス的な語りから逃れられなかったという言い方は、この箇所についてはテキスト的に間違っていないのですが、プラトン哲学が全体としてミュートス的だった、そして、そのミュートスを排除したのはアリストテレスだったという批判は的外れです。つまり、『ティマイオス』についてプラトンは明示的に、方法論的に「ミュートス」という単語を使って、いわゆる自然学が持っている限界を指摘したのですが、イデア論も含めたプラトン哲学の

全体がミュートスだという話は全く違う次元になってしまいます。むしろ、別の意味ではそう言えるのかもしれませんが、ここはすこし舌足らずか強引か、私としてはもう少し慎重に扱ったほうがよいのではないかと感じました。それから、111頁に「不文の教説agrapha dogmata」のことが出てきます。「一と不定の二」という原理によってこの世界はできているという学説で、プラトン対話篇には出てこないものです。アリストテレスや他の人たちが報告している、いわゆる書いていない教説ですが、これをプラトン哲学の解釈に入れるか入れないかが、プラトン研究の中で大きな焦点となっています。歴史的に言うと、新プラトン主義者はこれを積極的に取り入れています。この考えを基本的な枠組みとして使うことで、プロティノスの「一からの流出」という説が作られています。それに対して、これは使わない、つまり対話篇の中に書いてあることしか認めないという19世紀以降のメイン・ストリームのプラトン研究からすると、ベルクソンがここでやっている新プラトン主義的なプラトン解釈は評価が分かれるところになります。これは、正しいか正しくないかの問題というより、そういう解釈をしているという指摘です。

他方で、私自身はベルクソンのこのプラトン解釈は、お決まりのものだという感じが拭えません。先程言ったアンビバレンスについて言うと、反プラトンというところが前面に出てしまっていて、プラトンはアイデアで固定した概念化で、アイデアの不動性を強調したとか言われますが、実際にはプラトン哲学は非常にダイナミックな側面をいろいろと持っています。それをプロティノスが展開することになるので、プラトンはスタティックでプロティノスはダイナミックだと言うのはかなりおかしな図式だと思います。例えば『饗宴』のエロース論や、『パイドン』で出てくる変容や超越といったテーマがもつダイナミズムを見ると、アイデアは不動だ、はい終わり、というそういう話ではないと思います。その意味では、彼のプラトン理解は紋切り型で、ほとんどアリストテレス的です。プラトン哲学はこういうものですと説明して体系化したのはアリストテレスですが、その説明をそのまま受け入れているように見え、そこが物足りないと感じました。

### アリストテレス解釈をめぐって

では、アリストテレスに進みましょう。このアリストテレス解釈はかなり異様に感じたと思います。先程言った井筒俊彦の『神秘哲学』と同じですけども、アリストテレスは超プラトン主義者で、アリストテレスの中心は内在形相などではなくて、神なのだという理解です。プラトン主義の流れとして、プラトン、アリストテレス、プロティノスを並べて一つのまとまりで扱う哲学史だったら、このようにアリストテレスを位置付けることは可能です。もしかしたらそれが正しいのかもしれませんが、現代ではかなり異端に見える扱いです。どうしてか

という、アリストテレスはプラトンに反対した経験主義者ではなく、むしろプラトンの教説を補完して発展させたプラトニストだという見方だからです。さらに、プロティノスもアリストテレスと異なるのではなく、むしろアリストテレスの哲学を完成させたのがプロティノスなのだという図式です。そうすると「思惟の思惟」とか「第一の不動の動者」とか「究極のエネルゲイア」とかいうアリストテレスの基本は、まさにアイデア、あるいは一者というものの展開であって、逆にアリストテレスが強調した「このイス」とか「このウマ」とかいう事物は、縮減したアイデアにすぎないこととなります。アリストテレスとしては若干不本意に思うとは思いますが、そちらを強調している図式だということですね。したがって、非常に奇妙に思われた方もいるかもしれませんが、そこだけを強調してこのようにアリストテレスを取ることは不可能ではないし、実際そういう解釈の歴史があったということなのです。

もう一つ、アリストテレスの時間論のところですが、これも結構驚きますよね。すでに指摘したように、通常時間論とされている議論をきちんと扱っていない点です。時間は運動の数であるという定義にもさまざまな問題点があります。ところが、ベルクソンは彼の副論文で扱ったからでしょうが、アリストテレスの場所論との密接な関連を見えています。この点も私は決して間違っておらず、とても面白いと思うのですが、場所論と空間論のセットから時間を解釈していくのですね。アリストテレスの議論では、宇宙の、第一の不動の天が出てきます。第一の天球の運動を取り上げて、そこから「場所」が出てくる話と「時間」が出てくる話をパラレルで考えているという筋です。第一の天球の向こう側、というかそれを支えるものとして不動の動者が出てくるので、その意味で言うと、アイデアの永遠から時間が展開として出てくるというプラトンの話と、第一の不動の動者からこの世界が第一の天体を通じて出てくる、時間が生成するというアリストテレスの話は全くパラレルだ、こういうことになるのです。ベルクソンはこのパラレル構造を強調しているので、私たちの通常のアリストテレス時間論の扱い方とはかなり違う感じになっています。

### プロティノス解釈をめぐって

そして最後に、プロティノスのところですが、プロティノスについては非常に豊かな内容が論じられていて、きちんと検討する必要があります。ただ、もうすでに研究されている方もいらして、私は簡単にまとめることができませんでした。プロティノスの位置づけでは、両面性を見ている点が特徴です。これはしたがって、ベルクソンがプラトン哲学をどう見たかについて、最後の鍵になるわけです。つまり、プロティノスをプラトン哲学の完成だと見ている面と、まさに近代哲学が始まった点だと見ている面、その両方があります。ベルクソンによると、プロ

ティノスがあくまでもこだわったのは、プラトンが提示してアリストテレスが引き継いだ問題、つまりどうやって完全なものからこの世界が、あるいは時間が降りてくるのか、縮減してくるのかという問題であって、プロティノスは「意識」という概念を次第に作って行くわけですが、意識そのものへとどうやって降下してくるか、それを説明したのが彼の哲学だということです。最終的に226頁に円錐形が書かれるのですが、あの円錐形はプラトン、アリストテレス、プロティノス全員に当てはまる円錐形ですね。一番頂点の点に当たる部分が「一者」、ないしは「善のアイデア」や「不動の動者」になります。そこからこの世界は広がって縮減されて出てくるっていう図式なのです。当然『物質と記憶』の逆円錐形とどうつながってるのか、疑問になるので、教えていただきたいです。あれをひっくり返したら形式的にはかなり似ているのではないのでしょうか（笑）。つまり、ベルクソンがどうしてギリシア哲学を議論しているのかという話と関係して、プロティノスによって完成された普通の円錐形があり、逆円錐になるとベルクソンの時間論になるようなのです。その逆転の構造が、ビジュアル的に説明されているのではないかと考えていますが、もしかしたら私の空想かもしれません。近代につながる問題としては、意識、自由、個体的魂が出てきます。これらはプラトンやアリストテレスが直接には語っていないものですが、とりわけ宇宙靈魂といった概念が近代哲学への橋渡しになっています。そしてルネッサンスの話が始まることになります。

### ベルクソンの（新）プラトン主義的思考

ベルクソンとプロティノス哲学との、あるいは新プラトン主義的思考との親近性に触れます。いろいろなところに見られるので、列举します。まず、合致について、30頁にこうあります。「絶対的に知ることは、内側から知ることで、知られるものの内部に身を置くこと、それは知られるものと合致することです」。これはプロティノス、そしてプラトンやアリストテレスの「知る」という概念の内実です。それは、知られるものと知るものが一つであり、同じものであるということが「知る」ということです。つまり、知性と知られるものであるアイデアの一致、さらに神との合一です。プロティノスがポジティブに語ったこの合致という考え方は、プラトン主義での思惟という問題の本質に当たります。次に、内的変容の問題があります。57頁に「最も軽微な変化のためにすら、全体の深い内的な変容 (transformation) が必要である」とあります。この引用で十分に理解できるかは心許ないのですが、変容はプラトン主義にとっては決定的な問題です。超越、変容という問題について、持続の観点からどう捉えるかを語っている点も、プラトン主義と共通しています。次に、超越という点です。「哲学すること、それは純粹に人間的な諸概念を、つまり行動へと向けられた知性がもつ諸概念を超越すること」(66頁)と言われ

ます。「超越」という言葉はいろいろなところでいろいろに使われますが、基本的に哲学とは超越であるという、そういうことです。一方で、プラトンはアイデアや諸概念を作って固定化したと言われるかもしれませんが、プラトンからプロティノスに至るラインは、まさに超越することだという、ここに書いてあるとおりで全く構わないと思います。その意味では、先ほど来問題にしているように、ベルクソンはプラトンやプラトン主義に対して、一方では知性主義というレッテルを貼って退けると同時に、その実中身は非常に近くて、そこから自分の思索を生み出しているというアンビバレンスがあちこちにあると感じます。最後に、動的、つまり流出のダイナミズムという問題があります。一般に古代ギリシア思考は静態的とも言われますが、先ほど述べたように、プラトン、アリストテレスも含めて、アイデア論におけるダイナミズムという点が考慮されていて、あまりステレオタイプではない仕方で見ているのだと思います。

### 『創造的進化』のモチーフ

おまけとして、『創造的進化』のモチーフに触れます。これは単なるアイデアなので、空振りに終わるかもしれませんが、面白かったのが二つの道の話です。プロティノスについて「時間を生み出すための躍動 (élan) を探し求め」(233頁)とされています。もし根源的な生命から知性と本能というかたちで進化の分岐があって、私たちはその元のところに戻る、直観に戻ることによって知性を克服して直観を回復するという、あの創造的進化の図式が、今回私が読んだこの哲学史のモチーフに重なっているとすると、古代ギリシアに立ち返ることによって、第1の純粹持続の道を取り戻すことができるかもしれません。そんなものは納富のこじつけだろうと言われたらそうかもしれませんが、まあ、仮にそうだとすると、哲学史を使って人間の思考を現代の知性主義から遡って、直観を回復する営みとしてのギリシア哲学史を論じていると言えるのかもしれません。つまり、ベルクソン哲学の遂行としてのギリシア哲学史論、そんな感じがします。以上で報告を終わります。

○藤田 納富先生ありがとうございました。では、われわれ(藤田・平井)のほうから、今のご発表に対してそれぞれ簡単にコメントや質問をさせていただきます。

まず感想ですが、やはり古代ギリシア哲学の専門家にお話をさせていただいてよかったと感じております。どうしてもわれわれはベルクソン寄りに読んでしまうので、ベルクソンの目線から物事を理解しようとしてしまうところがあって、その歪みや偏りというのを客観的に、冷静に指摘していただけたのは本当によかったです。特にプラトンの部分ですね、とてもありがたいことです。単なる反プラトン主義ではなく、プラトンの部分がまさにベルクソンの中に



あってというあたりは、非常に興味深くお聞きしました。

さて、四点ほど補足的なコメントをさせていただきます。

一点目は、ギリシア哲学とベルクソンの関係です。「知性主義が現代の私たちも囚われている一つの謬見だとして、それを正すことがギリシアに遡らずに可能か」という問いに対する答えは「ノー」ではないか。ベルクソンが歴史的な反省を通じてのみ正しい見方を回復できるのだと考えているとすると、彼にとってギリシア哲学は必須の検討課題になる。そうおっしゃっていただいたんですが、そのとおりだと思います。『試論』（1889）や『物質と記憶』（1896）では、散発的に過去の偉大な哲学者たちを持ち出すことしかしていなかったベルクソンが、著述の形ではじめて自分なりの哲学史的なパースペクティヴを披露したのが、1903年1月に『形而上学・道徳雑誌』に発表された論文「形而上学入門」でした。

ギリシア哲学を大きな意味で敵というふうに捉えているというのもそのとおりかなとも思うんですけども、ただやっぱり単なる敵でもなくて、ベルクソンは、そこからずっと現代にまで至るかなり重要な部分があるというふうに捉えている。それは第5講に登場する「精確さという概念はギリシア人が発明したものだ」という話にも表れています。93ページのギリシア精神に関するところですね。ギリシア人たちは精確さの発明者でもありました。で、精確さというのは精神に不可欠のものではなくて、それなしで済ますこともできるんだけれども、ギリシアで発明されたんだと。精確さとは歴史上の偶発事なのであって、ある場所であるときに生み出されたものだと。したがってベルクソンはここでも古代ギリシアに戻るということに積極的な意味を見出していると言えます。人間がたどってきた歴史の中で「精確さ」は人間の知的な営みにとって本質的なものであった。そこをもう一度見ていこうということなので、恐らく単純に否定的な意味ではなくて、肯定的な意味合いで受け取られてもいるのかなという気はしました。

二点目はアリストテレスについてです。納富先生のご指摘通り、ベルクソンは博士副論文『アリストテレスの場所論』<sup>3</sup>に通じる姿勢を本講義でも見せており、時間とは「今、今」と続く運動の数であるという有名な定義を含む『自然学』第4巻第10章から14章の時間論をかなりさらっと流して、むしろ第1章から5章の場所論との「厳密な並行性」（157ページ）からアリストテレスの時間論に迫ろうとしています。たしかにアリストテレスは、時間は運動ではなく運動の数であり、その数とはそれを数える魂の存在と、そこで数えられる何かの協働だと述べています。ただし「時間とは感性の純粹な形式である」というカント的・相関主義的な近代の発想が時間を「偶有的」なものと考えののに対し、「魂がなければ時間もないだろう」というアリストテレスの発想は、一見「私たちであれば心理学的次元の考察と呼ぶであろうもの」（159ページ）に見えて、実は魂や時間を、思考の思考（神）やその減算された第一天球の運動から「必然的なものとして

与えられる」(160ページ)と捉えている点で決定的に異なるとベルクソンは言います<sup>4</sup>。「近代の人々にとって、意識はたしかに非常に重要なものですが、古代の人々にとって、とりわけアリストテレスにとってそれは、はるかに重要度の低いもの」だという指摘、現代の解釈のほうが「事柄を幾分狭い観点から捉えることになってしまう」(173ページ)という指摘には傾聴すべきものがあるように思えます。ハイデガーは、アリストテレスの時間論解釈において「今」ということを強調し、それはヘーゲル、ベルクソンにまで至るラインだと論じていくので、やはりこの点に関してもベルクソンとの関連を探っていく必要があるというふうにお聞きしていて感じました。それはアリストテレスを最終的にプロティノスにつなげて考えるかどうか、次のプロティノス哲学の重視ということと恐らく関係しているのでしょうか。あとがきでも指摘しましたが、ハイデガー的なギリシア哲学史観にあってプロティノスはほぼ位置を占めていないので、ハイデガーとの対比という意味でも、このあたりは個人的にもう少し掘り下げてみたいところです。

三点目は、アウグスティヌスに言及がまったくないという点です。これはカミーユ・リキエというベルクソン研究者によってすでに指摘されているところです<sup>5</sup>。同様のケースで言えば、例えば人格 (personnalité) 概念について、ベルクソンはやはりコレージュ・ド・フランスで1910-1911年度に講義することになるんですけども、そこでもトマス・アクィナスについて全く言及がない。これは現代的な研究水準から見ると問題があるところですが、リキエは当時の状況を理由に挙げています。つまり第三共和政の中でキリスト教哲学に対してある程度距離を取ろうとしていたのではないかということです<sup>6</sup>。実際、フランスで政教分離法が成立したのは1905年ですから、アウグスティヌスに関しても同様の推測が成り立つかもしれません。

四つ目は最後のあたりのお話です。縮減としての円錐形と『物質と記憶』の逆円錐はどう関係しているのかという点については、これはもう平井さんがお答えになるであろうと思いますので(笑)、そこは置いておいて、私が問題にしたいのは「超越」に関してです。本書66ページでベルクソンが哲学の定義として与えている「超越」——哲学とは「純粹に人間的な諸概念、つまり行動へと向けられた知性をもつ諸概念」の超越である——は、プラトンからプロティノスに至るラインにもあてはまるのではないかというご指摘がありました。実は、ベルクソン自身が「変化の知覚」という1911年にオックスフォード大学で行なわれた講演で、まさにこの点に関して正確を期しています。

世界の実際的な関心の側面から注意を逸らせ、それを実際的には何の役にも立たないものものほうへ向け直すという「注意の転換」こそが哲学だというなら、そんなことはずっと以前から行われていたではないか。哲学するためには遊離せねばならず、思索するとは行動することの逆であるという思想を「プロティノスほど力強く表明した人は他にいません」(PM 153)。ポイントは、

超越とは切断なのか方向転換なのかという点にあります。「もっと正確に言えば、プラトンならびに形而上学をこのように理解した人々にとって、生活から遊離して注意を転換することは、私たちの生きている世界とは違う世界へただちに身を移し、感覚や意識以外の知覚能力を呼び覚ますことだったのです。(…)形而上学者の思索がせめて半分でも万人の目に見えるものに向けられなければならないとは思わなかったのです。それどころか、常に別のもののほうへ目を向けていなければならないと言うのです」(PM 154)。

したがって一方ではベルクソンは「行動へと向けられた知性が持つ諸概念」から身を引き剥がす必要を説くわけですが、他方でその遊離は「万人の目に見えるもの」との切断ではなく、むしろ地続きの反転・方向転換でなければならない。「哲学は人間の条件をこえるための努力でなければならない」(PM 218)というベルクソンの有名な定義は、「哲学するとは、思考の習慣的な方向を逆転することである」(PM 214)というもう一つの有名な定義によって補完されなければならないということです<sup>7</sup>。ベルクソンにおける「行動」あるいはプラグマティズムとのこのような二重の関係が恐らく古代ギリシア哲学との距離ということになるかと思えます。簡単ですが、以上です。では平井さん、お願いします。

○平井 先ほど藤田さんからもありましたけれども、専門家の方に読んでいただけてプラトン解釈や、プロティノス解釈など、そういう文脈で見たときにどう見えるかという観点は本当にいろいろ勉強になりました。ありがとうございます。それで、一番大きな問題として、納富先生がご指摘になられたのが、結局古代哲学というものが、乗り越えられるべきものとして、ある意味前座扱いになってるんじゃないかみたいなことに対してどう答えられるかっていうことだと思んです。で、僕自身はこの前半部分っていいですか、プロティノスまでの議論というのは、訳してる途中に藤田さんといろいろ議論をしたりしながら、非常に面白く読んだということがありまして、それは具体的にはどういうことかといいますと、確かに、近世が折り返しになるのは、まさに彼が描いている大きなストーリーとしてはそうなんです。そこで前半と後半と大きく分かれる。「永遠本位」と僕は表現したんですけど、そういう時間の観点から、時間の实在性のほうにしっかりと直接コミットしていくっていう、そういうシフトがそこにあるというのは確かにそうなんです。逆に言うと、永遠本位というこのパラダイムの大局的な制約として永遠から始めているっていう思想的・知的なパラダイムがあるんですけど、その中で、時間をやはり古代のそれぞれの哲学者たちが何とか表現しようとしていたんだと。そこでだから、ある意味無理を強いることになるわけですけど、その前提条件が厳しいぶん、それだけ哲学者が試されるというか。その永遠からどうやって時間を出すのかというのがまさにその

問題の立て方で、普通に考えたら無理なわけですよ（笑）。だけどそれを何とかやろうとして、例えば中間に、つまり永遠と時間の間に、第一天球、永遠運動っていうものを出してくるとか、そういうアイデアは永遠だけで話が済むのであれば出てこなかったはずだし、時間に関心がなかったら出てこなかったはずだけでも、永遠から始めて時間を出そうとすると、そういうところで哲学者たちの知性が試されて、こういう非常に独創的なアイデアが続々と出てきた。それを一つ一つ辿っていくという部分が、やっぱり彼の読み方の、ベルクソン研究者から見たときのダイナミズムというか、スリリングな点だなというふうに思います。この部分はページ数の制限で、「解説」では書けなかったんですけども、具体的な点がいろいろ見れたほうが面白いと思うんで、早足なんですけどちょっと見たいと思うんですけど、例えばまず最初、122ページで、内在と超越の問題っていうものを、これを空間で考えちゃだめなんだと。時間で考えなきゃいけないんだっていうふうにするんですね。で、内在と超越の問題ももちろん近世でも大きな問題として続いていくわけですけど、これが古代の文脈で議論をされるときに、やっぱり僕たちも普通に放っておく内在と超越って、超越っていうと上にあるとか外にあるとかっていうふうに、空間的なタームで考えちゃうと思うんです。だけど、それを時間で考えなきゃいけないんだってことを、古代のテーマとして彼自身が考えていて。それは具体的にどういうことかっていうと、そこで出てくるのがさっき納富先生からもありました圧縮の比喩とかを使う、減算的生成のアイデアを使うと。そういうかたちで、永遠からひき算で、あるいは圧縮で時間っていうものが出てくるっていうふうにして、内在と超越っていうとこちの世界とあっちの世界っていうふうにする空間的に捉えがちなんだけど、その背後には時間の問題があって、永遠をどう時間にするか、持続にするかっていうその概念を彼らが作っていくプロセスっていうのを、ベルクソンが掘り出してきている。そこがすごくわくわくする箇所かなというふうに考えました。で、しかもそれがベルクソンから見ると、例えば減算的生成っていうアイデアっていうのは、メイヤサーが注目して言葉としては話題になっているように、ベルクソン自身の持続の考え方、知覚の考え方というものに、概念的道具として引き継がれる。つまり、普通はたし算でものを作るっていうふうな発想がナチュラルなんでしょうけど、その逆ですね。ひき算で新しいものができるっていうそのロジック自体が、ある程度ベルクソンの中で特異なものとして使われることになるわけなんです。その時、そういうものは「敵」としてというよりは、ある種の哲学的な「同志」として、アリストテレスとかがもがいて考えようとしたときに、こういう道具立てを彼らが彫琢して作ってきたものを引き継いでいく。もちろん場面は違うんだけど、そういうものがやっぱり蓄積されていった結果、近代に至る時間概念ができてくる。ある日突然どこでもないところから「持続」のような概念が出てくるわけ

じゃなくて、いろんなそういう哲学者一人一人が独創的に作り上げてきたそういう概念的な道具たちが積み重なってきた。それをベルクソンが拾っていくみたいな、そういうふうにした点がありました。今の圧縮の比喩の話は128ページとかに出てきますし、減算的生成のアイデアは135ページなどにも出てきます。それからアリストテレスの運動の数の議論についてなんですけども、アリストテレスの時間論でベルクソンが大事だとみなしたものっていうのは、基本的には関係主義的な時間の捉え方だと思うんですね。絶対的な時間じゃなくて、運動があって時間があるという。時間があって運動があるんじゃないで、運動があって時間があるんです。これは確か、136ページです。アリストテレスの第8講の冒頭のところで、3段落目ですかね。運動があって初めて時間があるんです。そこから運動の内部に「運動の内部」というキーワードが近世で非常に重要になるんですが、絶対時間みたいなものを認めないで、運動で時間が作られていくっていうところから、近世の運動の内部っていうアイデアにつながっていくっていうことは、確か139ページで予告してるんですね。139ページの最初の段落ですね。このアリストテレスの考え方が、のちにルネッサンスの人々を驚かせて、そこから運動の内部があるんだっていう問題の発見へとつながるんだっていう、そういうことが論じられている。

ちょっと挙げだすときりがなくなりますが、もう一個だけ。アリストテレスの「今」については157ページで、ここは不可分なものからは複合されてないという自然学4巻のところを使って、大きさを持つ現在、つまり幅のある持続というものをこのアリストテレスから持ってきています。で、もちろんベルクソン自身にとっても、この時間、持続に単位があるっていう考え方っていうのは非常に重要な考え方で、『物質と記憶』で出てくるわけなんですけれども、このアイデアがアリストテレスの、読解の詳細はここちょっと省かれてますが、不可分なものっていうものからアリストテレスがこう考えているんだっていう論点を出してる。あと、ほかにもアリストテレスの「接触」についての議論というのが177ページにあって、作用因と目的因について、原因から見れば作用因で、結果から見ると目的因だけど、その両方を見ると接触だっていう形相の伝播ということを構造として出してきたりとか、結構概念的にどう使って、どういうロジックが組み立てられてるのかっていうのをベルクソンが読み取っているところがある。アリストテレスや古代哲学全般についての僕の浅薄な知識を、すごく別の光で照らしてくれたっていう観点があって。そういう意味でいうと、トータルで彼が本講義の前半部で古代哲学を論じているっていうのは、近世での大きなパラダイムのシフトに至るために必要な道具立てを少しずつ拾い集めていく旅みたいな感じに読めるところがあって、非常に興味深かったのです。で、そろそろ時間ですかね。

○藤田 平井さん、コメントありがとうございました。この講義録に限りませんが、未だに「ベルクソンは空間批判してるくせに内部とか外部とか言ってるじゃないか」といったコメントがあってちょっと愕然としたりします。訳者解説の第7節で平井さんが非空間的な意味における内部と外部なんだということをはっきり言っているわけなんですけど、このあたりは繰り返した強調していかなければいけないところなのでしょうね。その意味でもよかったかなと思います。では続けて鈴木先生、よろしくお願いします。

## セッション2. 鈴木 泉：『時間観念の歴史』を解説する際の幾つかの補助線の提案

○鈴木 本来この合評会、もともと多分、納富さんの応答を知りたいということで企画されたのだらうと思いますが、同僚である私も近世担当ということで呼び出されたのでしょう。ただ、お読みになった方はおわかりになると思いますが、全19講のうち、近世関係はルネサンスからカントまで全部で5講しかないということもあって率直に言ってなかなかつらいところがあります。古代との関係に関しては納富さんからいろんなことを話してくださったので付け加えることは本当はないのですが、少し別な視点からこの講義録全体についていくつかの話をして、その後デカルト以降の話をしていきたいと思います。まず最初に、繰り返しになりますけれども、翻訳が見事だということは強調しておかねばなりません。そしてハイデガーの書簡のとある有名な翻訳を挙げられて、カタカナ表記でギリシア語を書くということの無意味さを指摘されていて、ギリシア語の転記上の多くの誤りの指摘も含めて重要なものだと思います。

### 『講義録』全体の問題

さて、この本をどう読むかってことなんですけれども、四つほど論点があると思います。

一つはやはり今、議論になったばかりですけれども、内在と超越ということをどう考えるかという問いに対して、ベルクソンが他の著作でどのように言ってるのかよくわかりませんが、2カ所か3カ所で示されている提案、この提案はすごく魅力的だと思いました。あまり議論をするようなことはそれほど書かれていないのですが、そして内在と超越というものを、空間的なもので考えてはいけなくてっていうだけでは足りなくて、私でしたら、むしろ内包的空間みたいなもので考えたほうが良いとふうにも考えますが、これは大きな話題になると思います。

2番目としては、これは私の仕事ではなくて、訳者の4人を含めたここにいる皆さんのお仕事だと思いますけれども、6年後に刊行されるんでしょうか、『創造的進化』読解への寄与ということが多分あって、これは、つまりハイデガーの『時間講義』が27年の『存在と時間』

を読むための基礎資料になっているということと相似した資料になるのかもしれませんが。思ったほどはならないのではないかとというのが私の感触ですが、これは素人の感触に過ぎません。

3番目としては、ベルクソンの哲学史像を全体としてどのように見るかということで、これについては納富さんの議論と重なり、同じようなことを繰り返すことになりませんが、少し考えてみたいと思います。その中でもプロティノスの位置づけはすごく大きい。しかも、4回の講義がプロティノスにあてられるのに対して、さきほど納富さんがおっしゃってたように、時間概念の講義であるのにアウグスティヌスが不在であるということが決定的だと思います。さらに加えれば、ボエティウスを典型とし、永遠ということを考える場合にまずは取り上げることもできそうな教父系の哲学が不在であるということもかなりの問題をはらんでいるんだと思います。あとで少しだけ考えてみてもいいと思います。

そしてアウグスティヌスだけではなくて、中世哲学全般ですよ。トマスは少し出てきますけれども、その後いきなりルネサンスに飛ぶというのはどう考えてもあり得ない。このことは、すぐ後で触れるある研究、ある本との関わりで強調しておきたいと思います。オッカムを代表とする中世の哲学者を経て「時間概念」はどのように展開されていくのかということ普通考えるんだと思うのですが、それが全くないっていうのは果たしていいのだろうか。しかもそのような記述が、ルネサンスを評価する、しかもそのルネサンスの評価が新プラトン主義の復興というかたちで語られている。これは明らかにベルクソンの選択なわけで、それはライブニッツをどう評価するかってこととも関わるわけですけども、ここもやはりすごく気になるということです。

最後に四つ目としてプロティノスに関して言えば、「意識の理論を提示した最初にして唯一の古代哲学者」(195頁)として提示するというのは強い主張です。ここはまたアウグスティヌスとの関係が問題となるわけですが、それだけでなくプロティノスをどう評価するかという問題自体として重要です。ベルクソンの一つの鮮やかな視点ですけども、その鮮やかな切り断ち方をどのように評価するか。

以上、内在と超越、『創造的進化』との関係、哲学史の全体像、それからプロティノスの位置づけ、このあたりがまずは考えられるべき論点なのかなと思いました。

### 三宅剛一との対比、問われるべき事柄

さて、近世関係の講義を読んだ場合に、ライブニッツを論じた第18講は率直に言って褒められたものではないと思います。それも、仮にベルクソンがライブニッツについてさほどのことを知らず、通俗的なライブニッツ像を示すしかなかったということであれば、まあこんなもんかと思うわけですが、そうでないという具体的な証拠が既にあるわけで、それは1898年のライ

ブニッツ講義 (in *Annales bergsoniennes : Tome 3, Bergson et la science*, PUF, 2007) です。これはものすごく面白いかどうかは別にして、ベルクソンがライブニッツをよく読んでることはわかるし、様相概念を巡る議論に関してベルクソンはここから糧を得ていたんだろうということがよくわかるという意味でも、学者としても哲学者としても力量を示している。それに比べると、本講義でのライブニッツ読解はあまり筋がよくなくて、論じるに値しないまでは言わないまでもそう刺激的なものではない。そうすると、この講義録をどう評価したらいいか。ハイデガーの25年の講義とか、そういったものに比べるとそれほど新鮮なものではない。古代哲学に関しては別の評価を与えることが出来るにしろ、折り返し地点から後の近世哲学に関する部分はややちょっとつらいというのが率直な印象です。

ただ、この講義全体を考えてみたときに何をそこから得なければいけないのか、本講義の一番の問題性は何かということと考えたのは次のことです。この講義録を読みながら、実はある日本人哲学者・哲学史家の研究書を思い出していました。三宅剛一です。学習院大学で開催された合評会なので三宅剛一の名前を挙げたというわけではなく、三宅剛一の『学の形成と自然的世界』(1940年)という名著があるわけですがけれども、私はこの講義を読みながら、そしてこの準備をしながら改めて三宅剛一の『学の形成と自然的世界』という本を思い起こしました。私はこの本が大好きなもので、時々読み返します。

この本は研究書ですので講義録よりこちらのほうが密度が濃いのは当たり前なわけですが、論じている対象にかなりの相同性がある。ピタゴラス派における数論の形成から始まって、プラトンのイデア論、それから特にさっき納富さんが触れておられていた「不定の二」。この最後のものに関して、彼は思い切った解釈をしている。次に『ティマイオス』、そしてアリストテレス、ストア派、さらにプロティノス。プロティノスに関してはかなり言及があって、そのあと中世哲学、スコトゥス、オッカムを半ば孫引きですけれども解釈したあとで、デカルト、ライブニッツ、カントですよ。ほぼ同じでしょう。ベルクソンにはストア派が欠けてるのかな、しかし全体に構成は似てるわけです。ですから、実はむしろ講義録においてベルクソンにこういうことをもっと主題的に論じてほしかった、という感想を持ちました。

もちろんこの講義録というのは時間論やベルクソンの持続ということを考えるときの、いわばネガの歴史を描くという側面を持ってはいます。それは藤田さんが解説で示しておられる通り、「否定作用」に注目した哲学史読解」(431頁)なのでしょう。しかし、ベルクソンと三宅剛一の哲学史読解を重ねて読むときには、時間論や持続論の哲学的読解よりも、ベルクソンとともに考えなければいけなかった、そして、三宅さんの本とともに考えなければいけなかったこと、それは、普通に言うと、一と多、ないしは無限と連続という主題でなかったか、とい



う感想を抱きました。もう少し正確に言うと、形而上学的な問いの核心を考えると、一と多という問題、ないしは一と多を統一的に考えるようなことができる無限をどう捉えていくかということ、これがおそらくは本来ベルクソンが考える主題なのではなかったか。変な言い方ですけれども、そのように考えました。一と多ということを考えるときに、プラトンであれば、先ほど納富さんがおっしゃったようなアイデアがあるとして、しかしそれがどういうふうに分有されていくのかという問題がありますが、それがまさに三宅の本の主題でもあるのです。

こういった主題の重要性に関しては、最初の四回の講義を読んだときに強く意識されました。最初の四講はベルクソンのことを若干知っている人であれば、「それはもうわかっている、やや退屈だが、でも大事な議論のおさらいにはなる」というふうに思われかねないところですが、そこでキーワードになるのは何回か出てくる「無限」です。無限はいろいろな現れ方をすけれども、それを一と捉えるということ、これが大事であり、結局形而上学はそういうことを捉えるのだというような規定が、読んでいく中で次第にわかってくる。

ベルクソンの講義そのものはもちろんそれを時間や持続の議論として論じていくのだけれども、事柄としてここで彼が考えたいことはいったい何なんだろうかと考えたときに、まさに「無限」をどう考えるかということだったのではないかと私は思います。具体的に見ると、一方では単純なものとして把握されており、他方では決して数え終えられることのない仕方で知られているもの、それはまさしく私たちが「無限」と呼んでいるものです。「無限」とは定義そのものからして、一方では単純な把握を、他方では汲み尽くしえない数え上げを含むものだからです。こう言って始まるんですよ。

その後の講義の中で、最後の、特にカントに至るまでの中で、うまくこの問いがずっと持続しているかっていうと、やや怪しい。もしかしたら、皆さんがどこかでつながっていると教えてくださるかもしれませんが、最初の問題意識が最後まで通奏低音のように流れていかなかったところに、この本の齟齬というか、この講義が全体として何をしているのかということの問題性が表れているように思います。最初の第4講までの議論と、それ以降にやや乖離があるような気がしないでもありません。

時間論や持続の議論としてこの講義を読むというのは、やはり事柄としては否定的な役割しか有しておらず、積極的なことを語ろうとすると、結局、手を動かしたらこれ一つでしょ、っていう話ぐらいしか言っていないくて、そんなこと言われてもっていうふうに普通は思ってしまう。むしろしかし、こういう手の動きの中に語られる実在というものは、結局「無限」ということを考える問題なのだ読み替えていくようなことが、多分この講義で本来やるべきだったのではないのでしょうか。ベルクソンその人に対して講義の内容を指令するという尊大でひどい

言い方ですけれども、以上がこの講義の問題性ではないかというふうには私は考えました。

このように語ってしまうと、三宅剛一は偉いという話になってしまい、三宅剛一とベルクソンを比べてどっちが偉いって言うてもしょうがないんですが、三宅剛一はそのように筋を通して一個の哲学史を形而上学的な主題を軸に描き抜いた。しかもさらに対比されるべき主題があって、どういうふうに評価するかは難しいのですが、ベルクソンの場合はやはり主題は時間であるのに対して、三宅剛一の場合は、それを空間の問題として扱うわけですね。空間における一と多っていうのが基本的な主題で、こちらのほうがやっぱり事柄として素直なんですよ。

プラトンの場合、時間を論じられないが、そのプラトンの『ティマイオス』の神話において最初の時間論が現れる、しかし、アリストテレスはそれを省いたから時間論としてよくなっている、云々とベルクソンは論じていく。ところが近世哲学を時間概念の歴史として読み抜くことはやはり無理なんです。後でデカルトに関する議論に少し触れますけれども、デカルトも時間については考え抜かなかった、とベルクソンは評価する。それはそうでしょう。近世はむしろ空間の時代なのです。

だからこそ、この点を引き延ばす三宅剛一の本は非常に面白い。一挙に与えられる空間っていうのと、われわれが時間的な契機の中で考えていく空間っていうものがどういうふうにつながっているのかとか、ライプニッツにおいて多元的なモナドというものの空間性がどういう問題をはらんでるのかとか、事柄に即して議論をしているんです。

そうすると、こういう言い方をしたら元も子もないのですが、ベルクソンのこの講義は言ってみれば時間概念や持続っていう概念の半ばネガの歴史を描くっていうことによって、本来事柄として論じられるべき「一と多」の問題や、「無限」の問題を結局上手く取り扱ってないのではないか、つまり第4講までにおいて示された主題に対し、積極的には結果が論じられていないのではないか、そういう感を強くしました。

ここから三宅剛一の仕事と、例えばベルクソンの仕事を逐一对照していてもいい、とりわけそれはプロティノスの解釈において大きな問題を示していると思いますが、その余裕はありません。個人的には三宅剛一のこの著作は、日本の哲学史ないしは哲学史産業の中で、ここまで骨太なものは殆どない稀有な著作です。もちろん今となっては哲学史研究としては古い。例えば中世に関しては原典からの研究ではなく、デュエムの本からの孫引きで済ましており、今となっては通用しない仕事ですけれども、しかしここまで一貫した問題関心をもって事柄を明らかにしていくというスケールの大きい哲学者・哲学史家はなかなかほかにいない。しかも素材がほぼ対応していることもあり、そういう意味では私はベルクソンのこの時間概念の講義を、ハイデガーと比べるよりも、むしろ、わが三宅剛一の仕事と並べてみたほうが面白いので

はないかというのが、個人的な感想と提案です。時代としてはしかし40年ぐらい離れてますから、単純な比較は難しいですが。

### ベルクソンの哲学史像に対する評価再び：デカルト解釈

#### 西洋哲学史における時間論の二つの系譜

ベルクソンの哲学史像そのものに戻れば、やはりアウグスティヌス不在というのが大きい。私たちが時間という概念を考えると、よく大学の講義などでもこういう話を私などもしますけれども、運動の数としての時間、つまりいわば世界の側のものの運動というものから時間が生まれてくるんだってというふうに考えるアリストテレス系列の時間論と、心というもの、心の緊張だったりそういったもののほうから時間を考えていくという二つの筋があるんだよというふうに、大きな枠を提示することが多い。そしてアリストテレス系譜の時間論に対して、アウグスティヌス系統の時間論というのは、結局のところはフッサールに行くんだよねって、こういう系譜を描く。

ところが、ベルクソンは「要は心理的な（ないしは心の側の）時間っていうものが見いだされなかったからダメなんだよ」という議論をずっとしているのに、何でそれを、まずはプロティノスっていうのはわかりますけども、むしろ普通はどう考えてもアウグスティヌスへ向かうんじゃないかというのがあります。ひとまず永遠ということを考えれば、当然ながらボエティウスとか、あとは中世後期のオッカムとかそんな人まで入れちゃうと、ちょっと話が長くなってしまいますけれども、初発のところでアウグスティヌスが描かれていないっていうのはどうにも疑問です。ギリシア哲学史講座の講義であったってことに由来するのか、その辺よくわかりませんが、やはり大きな問題をはらんでいるし、われわれとしては、ベルクソンの場合の時間概念は、例えばですが、アウグスティヌス系統の時間論と普通は関係づけて論じられるべきであるところ、ベルクソン自身がそれを回避しているというのはやや不思議に、奇異に思いました。

無限小と内的持続、その歴史に関しては、正直言ってどういうふうに評価していいかわかりません。というよりも、ベルクソンは無限小についていろいろ知っていたわけだけでも、今の科学的な知見から言って、ガリレオ、ロベルヴァル、バロー、さらにはそれに先立つベネデッティに関するベルクソンの評価がどれだけの科学的正当性を有しているのかという点に関しては、私には評価はできません。問題は、近代以降の二つの道、持続・直観・動性の科学と普遍学という二つの道の対立やそれらの間の揺れ動きを軸とする哲学史・観念史の記述だと思われまふ。この記述やその構図に関してもどう評価していいかわかりません。

### ベルクソンのデカルト解釈：持続の直観と体系の精神

一応元デカルト研究者としての役回りを引き受けて、ご存じの方も多と思うのですが、デカルト解釈をめぐって具体的に検討してみましょう。

まずは持続の直観と体系の精神、この二つがあって云々というものです。ただ、ベルクソンの議論の定式化に問題があるということではなく、一般的には多分このように整理されることが多いと思います。研究のレベルはあがっていますので、定式化の精密度もまた上がってきているけれども、多分このようなことが繰り返されてきた、きっとその原型だと思うのです。

コギトについては次のように言っています。プラトン、アリストテレスに関する一般的なまとめでしょうが、出来上がった概念を扱うのが古代であるのに対し、デカルトは新しいことをやったのだ、と。生成するデカルトといった像なわけで、生まれつつあるデカルトというのがある、そして、それがコギトだっていうわけです。「私の思考と私の現実存在」、引用ですけれども、「私の思考と合致している限りでの私の現実存在」の二つ、この二つを、私が同時に意識するのは、まさしく時間において、持続においてのこと」（284頁）だと。「デカルトは直観から、したがって持続から出発しました」（289頁）というわけです。何の典拠も挙がっていません。ベルクソンが「私はこう考える」ということなわけですけれども。この引用の「デカルトは直観から」の直観は、これも恐らくベルクソンのいう意味での直観ですよ。デカルトも直観という言葉を一時期自らの術語として使ってたわけですが、そうではなくて、ベルクソンの直観っていう意味で、こういうふうにとまとめているわけです。

この解釈はかなり独特というか、思い切った態度決定だと思います。デカルトのコギトをこういうものとして、つまりデカルトのコギトは持続なのだというふうに読むというのは非常に独特で、しかもそれがプロティノスの議論との対比において論じられているということがまず独創的です。これはやっぱり明記しておくべきことだと思います。これはかなりベルクソン独特な議論だと思います。もしかしたら、メヌ・ド・ピランとか、そういった先人たちとの関係の中で、以降のフランス・スピリチュアリズムとの関係の中で培われてきた考え方もかもしれませんけれども、独特だと思います。

それに対して、デカルトにおいては体系の精神があって時間論そのものは深められなかった、ということになる。外的持続に関しては事物の持続を範型とする連続的創造説があり、内的持続に関しても、その記憶論が示しているように時間を非連続的なものとしている、と。結局そのあとはどうなるかという、持続だけで、つまりコギトだけでいけるかという、もちろんそうはいかなくて、本文を読む限りは、『省察』や「諸答弁」の議論よりも『方法叙説』第5部の議論を基にしているようだけれども、無限観念がもう完全性になっているので、コ

ギトだけでは済まなくて、それを完全性の観念に重ね合わせ基づけて、持続を「永遠へと帰属させる」(289頁)、根づかせることになる。

### デカルト研究において繰り返される対立的解釈

こういうかたちで、持続の直観と体系の精神を対立させて、それが共存してきたのうまくいってないというのが最終的な評価になるわけですが。この対立図式というのは、デカルトを解釈するときに、繰り返し手を変え品を変え出てくるお話です。言うまでもないことですが、1940代から50年代にかけての、ゲルーとアルキエの論争というのは、まさにそれの一変種です。もちろん、研究者は新しい解釈を出さないといけないから中身はすこしずつ変わっていくんですが、基本的な構図は——これは要するにフォーコー言うところの、フランス哲学・思想の構図の流れみたいなものと絡むのですが——「直観 対 体系」という図式ですね。アルキエのほうが直観で、ゲルーのほうが体系っていうことになりましたが、こういう対立があって、それが今にまで続いている。

ただ、その後の時代になってくると、この両者は統合して解釈しようという流れになって来ますが、これもご存じのとおり、ジャン＝マリー・ベサード (Jean-Marie Beyssade) が『デカルトの第一哲学』(1979年) という博士論文を書いたときに、この二つを調定しようとするわけです。この本でやろうとしたことは、結局デカルトの時間は非連続的で瞬間的な時間であるというふうにジャン・ヴァールの1920年の解釈 (*Du rôle de l'idée d'instant dans la philosophie de Descartes*) 以来言われてきたけれど、そうじゃないよ、と。そうではなくて、デカルトのコギトないしは意識概念、意志概念というのは持続を含み込んだものであるという解釈を出しつつ、しかしそれが永遠性の次元へと上がっていくっていう、そういうデカルトの時間や永遠の議論を統一的に解釈しようというふうにしたわけです。

このベサードさんの解釈はかなり完成されていると思うのですが、不思議なのは、ベサードとベルクソンはどう関係するかというと、実は逆に親近性があると思うのです。つまり親近性があって、というよりもベサードの本のほぼ最初のページにおいて、デカルトのコギトというのは、ジャン・ヴァール以来、連続的なものではなく、非連続的・瞬間的なものだというふうに解釈されてきたけれども、実はそうじゃない、そしてそうじゃないということを言っていた人はすでにいるのだと言って、名前が挙げられているのがある研究者とベルクソンなのです。

ベサードは、持続の哲学というデカルトのもう一つの道を示唆する一例として、ベルクソンの『創造的進化』の一節を引用して (Beyssade, *Op. cit.*, p. 19)、博士論文を始めています。ただ残念なことに、ベルクソンの講義同様——ベルクソンの場合、講義録だからしょうがないっ

ということになるのでしょうか——、どういう意味でデカルトのコギトが持続なのか、どこでも明らかにされていない。驚くべきことだと思うのですが、実はベサードの本をいくら読んでも、デカルトのコギト概念というか、思惟、考えるということですが、思惟するということが、どういう意味で持続なのかということはどこにも書いてないわけです。

持続ということを考えるとするならば、まず前提となるのは、それが空間化されるものではないというか、空間化されることによって純粹持続が消え去っていったり、純粹持続が空間化されるっていうことを介してしか繰り広げられないのだとか、持続と空間をどう考えるか、それからそこに異質の多様性とか、そういう多様性の概念をいろいろ入れて、持続って何なのってことを議論しなければいけないはずです。ところが、非常に残念なことにベサードは、空間、コギトってというのが、瞬間的なものでなく、何か続くっていうことだけを指摘しているに過ぎず、それが結局彼の時間に関する議論のすべてなのです。

ベサードが『デカルトの第一哲学』の中でベルクソンを引いてるのは実は2回だけで、持続という概念を本格的に検討していないというところに哲学的な甘さを感じるのですけれども、いずれにせよ、デカルトのコギトの議論に関してベルクソンは講義録で自分の解釈を少し出してみたということだと思います。ベルクソンの講義から1世紀以上が経つわけですが、反復され続け、同じような歴史が繰り返されてきたと言いましたが、実のところ70年経ってもコギトの持続ということの内実が明らかになっていないというのはある意味驚くべきことです。

われわれはここから何を学ぶべきか。ベルクソンは自分のある種のアイデアを出しただけにすぎないと思いますが、それでもベルクソン自身はデカルトの出たばかりのAT版の第5巻に入っている『ピュルマンとの対話』からきちんと引用していることからわかるように、テキストを一応読んでいるというのも事実であって、それに比べるとデカルト研究は同じ解釈的状況を反復しており、それが終わったかというけっこう怪しい。先ほどこちら辺はうんざりするみたいなことを言いましたけれども、うんざりするのはいいけれど本当に解決がついてるのかというと、実はそうでもないということを示しているわけです。

今回の講義録の範囲を超えますが、心身問題の話などはその典型ですね。経験によって合一がわかればいいとデカルトは言っているのに、余計な疑似問題を研究史自体が創り出している、という風に今でもデカルト研究はいろいろ問題を抱えていると思いました。

### ライブニッツ解釈

ライブニッツ解釈に関してはもっとがっかりするところが多い。結局スピノザ、ライブニッツをデカルトの後継者たちというふうになづけて、スピノザやライブニッツといった哲学者た

ちの努力は、かなりの部分、デカルト主義を古代哲学のような哲学の形式・構造へと帰着することに費やされた、と。そして、永遠と呼び得るもののうちに、神のうちに身を据えるんだと、こういうふうには議論を進めていく。これは『創造的進化』の議論と同じですね。

他に論点として挙げられるのは、モナドを論じたうえで、プロティノスとの親縁性というわけで、それを「予定調和」というのは適切でないから、むしろ *conspiration universelle* っていうふうに言うのがいいのだと言って、あとはライプニッツとプロティノスのさまざまな類縁性を論じていくという、そういうテキストになっている。

時間論に関して言えば、ライプニッツの「クラーク宛書簡」を引くのが基本ですが、ニュートン＝クラークという相手に対する論争的な文書だからあまり使っちゃいけない、学ぶところもないと言った後で、驚くべきことに持続概念の理解に関しては『形而上学叙説』と「アルノーとの往復書簡」を扱い、いわゆる完足的個体概念、主語には個体に生じた出来事がすべて含まれているというライプニッツの議論を取り上げ、それを幾何学の図形の定義から特質が出てくるのと同じようなものとして考えて、持続は補助的なものだと結論づける。

結論として言えば、結局ベルクソンは、本格的なライプニッツ研究の出発点に位置し、ラッセルとともに論理的解釈を与えたクーチュラの議論をそのまま引き受けて、時間を解釈しています。その限りで必ずしもオリジナリティはない。冒頭で申し上げたように、1898年つまりこの講義の4、5年前になされたベルクソンの演習のほうが密度が高く、スケールが違います。そうすると、この講義録の近世の箇所をどのように評価したらいいのでしょうか。デカルトのところは大雑把だけれどもそれなりに意味があるとして、ライプニッツのところはいったいどんなものなのでしょう。疑問を出さざるを得ないということになってきました。

### スピノザの不在

そしてもう一つ、『創造的進化』の場合、通常の哲学史記述と同様、スピノザとライプニッツはともに並ぶ相手ですね。ところが、少なくともこの講義録においては、どういう理由かはわかりませんが、スピノザは表に出てこなくて、いわば露払いの役をしています。所々出てくるにしても、特に時間論との関係、ライプニッツとの関係において、アリストテレスとの類縁性が指摘されているよと述べ、ヴィクトル・ブロシャール (Victor Blochard) の論文を指示するだけで、「スピノザ哲学を論じることはできません」と言って、ライプニッツについて「大まかに示したい」(297頁) と話は進む。

ライプニッツとスピノザ、この2人をほぼ同じようなものとしてベルクソンが見ているのは確かですが、このポスト・デカルトの二人の哲学者の同一性と差異は、スピノザの徒としては非常

に気になるところです。スピノザに関する講義や演習をリキエ（Camille Riquier）が本の中で引いているから、講義ノートが残っているのでしょう。そこで何を論じているかということは、非常に気になるわけです。これは私自身がスピノザの徒だということがあるんですけども、ベルクソン自身がスピノザをどう考えていたのかというのは、私ならずとも気になるでしょう。

ベルクソンは有名な講演「哲学的直観」の中で、スピノザの場合にはある種何かあるんだということを言う有名なテキストがありますが。でもあれは、単にスピノザを挙げただけだというふうにも言えるかもしれない。しかし、事柄として考えてみた場合に予想がつくのは、当然ながら、スピノザの場合、第三種認識といたら永遠を語るわけです。「スピノザは永遠の相の下で認識する哲学であるのに対して、ベルクソンは持続の相の下で認識する哲学なのだ」と言われたりもするわけで、その「持続」に関して持続の哲学者が永遠の哲学者をどう評価したのかということ、ベルクソンがスピノザから何を得ようとしたのかということも含めて興味深い。

ベルクソンは『創造的進化』を出版した後にスピノザ演習を行うんですが、扱っているテキストが『知性改善論』なんですよ。これも『時間観念の歴史』講義の序文で校訂者のリキエが書いてるように、講義や演習というのは（フランスの場合はっていうことなんですか）教師としての職務に立ってやっていて、必ずしも自分が著作活動を繰り広げることとリンクさせない。むしろリンクさせてる珍しいケースがこの著作なんだという話もありましたけれども、しかし円熟期のベルクソンが、自分の興味関心とはまったく関係ないものを選ぶというのも考えられないわけで。そうすると、ライブニッツではなくスピノザを取り上げているのはどういうことなのかというのは、やはりかなり気になるところです。

しかも、これまた三宅剛一さんにつながるのですが、三宅剛一は次のように言うのですね。これはこの本の中で繰り返し出されているすごく面白い視点なのですが、ライブニッツ的な個体の道を取らずに、空間が全体としてわれわれに表れてくる、それがわれわれが生きる空間っていう次元との関わりで生きられるようになるっていうときには、必ず空間っていうのは一様なものとして結局われわれに一挙に与えられるんだ、と。

個体化される前に、全体としての空間がわれわれに与えられる。これは元を辿ればストア派に行くような考え方です。ストア派の「全体としての空間」というのは、物体がわれわれに与えられて、その中でわれわれが考えていくんだと、こういう一と多の考え方に対するスピノザ的な表象っていうのが一方にある。これを拒否するために、ライブニッツは個体ってことを言ってる。しかし空間概念、一様な空間概念、つまり延長ですね、延長がわれわれに与えられて、それを限定していくっていう立場を取るのか、それともライブニッツ的な個体の立場を取



るのか。近世っていうのは、空間を巡ってこの二つの道があったのだと言うんです。

そして、ここが三宅剛一のこの本の一番重要なところの一つなのですが、カントはどうなったかという、カントは結局スピノザの道を取らないためにこそ、形式としての空間っていう概念を導入したんだという、こういうストーリーを描いていく。ここはなかなか面白い議論で、しかもそこにプロティノスなどが入ってきて、空間概念、つまりわれわれの生きている延長的な空間というものがどういうふうに与えられるのか、それをわれわれが限定していくのか、むしろ個体ないし個としての魂だったり、それに従属している延長というものが、いわば下から積み上げる仕方で個体や世界が生まれてくるのか。この二つの道のどちらを取るのかというのが決定的だったんだという議論を三宅はしてるんですね。

こういう問い、つまり個体化もベルクソンにとってすごい大事な問題であるはずですが、個体、そして空間や延長の問題がむしろ表に出てこないということが、スピノザとライプニッツという哲学者の系譜の区分けがあまり見えてこないというこの講義の構成につながっているのかなという感じをもちました。

### 締めくくりに

当初の問いに戻ると、もちろんこの講義を通して、特に古代のところから学ぶことは多いわけで、ネガとはいえ、ベルクソンがここで本気になって議論していることは本格的で面白いのですが、私としては、何度も触れた三宅剛一の名著とこの講義録との対比をしつつ問題を考えてみたら面白いのではないかという提案をしたわけです。その場合むしろ「空間」概念そのものを（古代はともあれ、近世においては）考える必要があったのではないかというのが少し踏み込んだ問題提起です。

### ベルクソンと三宅剛一を分かつライン：無限論の刷新

しかもその場合のポイントは「無限」です。ここはちょっとベルクソンに厳しいというか、無理難題を言うことになるのですが、「無限」概念をめぐる数学基礎論の問いがちょうどベルクソンと三宅を区切ります。現代における「無限」概念の刷新、現代的な「真無限」の議論が出てきたのは、この講義の少し前ですね。そして例えば、クーチュラの『数学的無限』の刊行が1896年。ベルクソンは「無限小」の話はしているけれども、いわゆるライプニッツ由来の連続体の迷宮とか、連続体の問題であるとか、切断の問題などへのベルクソンの関心や対応はどのようなものでしょう。

こういった問題への本格的な対応が視野に入ってるか入ってないかというのが、ベルクソン

と三宅の本の間に線を引くラインです。三宅はこのラインを強く意識していて、これは序文で言っているんですが、数学における「無限」の問題の扱いがあったからこそ、例えばそれをプラトンやアリストテレスにまで投影した上で、カントにまで至る一筋の議論を書くことができたのだ、と。

それが無いということが、どうも私がベルクソンのこの講義録の、特に近世以降のところを読んだときに感じるかなり大きな不満の原因になるように思います。もちろん時代的な制約もあるので、そのことをあげつらってもしょうがないんですけども、しかしベルクソンはカントールやデデキントの後に来た哲学者なわけですから、それらの数学における議論をよく知っていたはずですよ。

この講義録以降のベルクソンの仕事の中で、スピノザの扱いがどうなっていったのかということも詳しく知りたいところですが、それ以上にまずは無限の扱い、無限小の扱い、無限のパラドックスの問題の扱いというのがベルクソンの中でどういうふうに展開していったのか、あるいは展開していかなかったのかということは、この講義録を読んで知りたいと感じたことの一つです。私がコメントできるのはこのくらいでしょうか。書評会での提題は、当の対象から肯定的なことを引き出すことがまずは求められると思いますが、それが出来ずに不満と今後知りたいことの列挙になってしまいました。この点、どうかお許し下さい。以上です。

○平井 ありがとうございます。素晴らしいお話でした。

○藤田 素晴らしい。納富先生のパートでも申し上げましたが、やはり専門家に聞くというのは大事であると繰り返し感じました。一見すると非常に辛口で、「正直だるい」という言葉を何度聞かされたかという感じですけども（笑）、例えばデカルト解釈のところで典型的に表れていたように、現代の解釈状況においても実は無意識に反復されているような問題、現代の研究者にはもう関係ないとはまだ言えない問題にベルクソンもはまっていた。だからこそ、そういう「だるい」近代哲学史観しか持てなかったんじゃないかと感じました。今でも続く根深い問題をベルクソンは、ある意味、それこそ現代的な哲学史研究のネガとして体現してしまったのだと。

個々の点に関しては、なるほどということばかりだったんですけども、一番争点になるかなと思ったのは、近世は空間の時代である、にもかかわらず近世における空間概念をどう考えるかということが、ベルクソンはうまく出来てなかったんじゃないかという点です。この点に関しては、鈴木さんが近世パートの読解の中で実は一番足早に通ら過ぎた第16講で、ベルクソンが近世の数学者たちを論じている個所が争点になると思うんですね。

おそらくベルクソンが扱おうとしていたのは、数学における空間概念が成立していくまでの間であって、つまりベルクソンは空間概念が成立する直前の時期に可能性を見いだそうとしているんじゃないか。だから、ネガかもしれないけれど、それはポジとネガが反転するような単純なネガではなくて、ポジとネガの「あいだ」を見ようとしているんだと思うんですね。

例えば、この第16講には *intentio* (インテンツィオ) が登場しますが、ただしそれはアウグスティヌスに由来する「心的な緊張」のようなものではなく、まさに空間と関係するものとして扱われているんですね。269ページの3行目で「運動の持つ内部性とは何でしょうか。それは何か意図のようなものだとっておきます」と言われています。一見するときよっとする言葉で、この *intention* をどう訳す? と平井さんとすごく悩んだところなんですけれども、でも「意図」としか訳せないよね、と。第16講ではこの概念との関係で「無限小」が登場するので——「無限」、とりわけ一と多を同時に考える無限を「空間」概念との関係で考えるのが形而上学だという、先ほどの鈴木さんの定義とは少しずれるかもしれませんが——、数学的な空間概念が完全に成立する手前で「無限小」を扱うというのがベルクソンなりの形而上学へのアプローチだったんじゃないかというのが私からのお答えということになります。他にもいろいろあるのですけれども、ひとまず平井さんにバトンタッチします。

○平井 本当にありがとうございました。三宅剛一さんの本っていう懐かしいものが出てきて、胸が熱くなりました。確かすごく最初の頃に、師匠の福居純先生にこれを読みなさいって言われて、だから僕の近世哲学、三宅剛一さんの影響を多分最初の頃にすごい受けてるんで、今、それを思い出して。確かにおっしゃられたとおり、比べると非常に面白いですよね。ちょっとまだ頭まどまどないんですけど、実に面白いです。それで、ちょっと答えというか、デカルトのところから入っていきますと、今、名前挙げましたけど、僕は福居純先生のところで哲学の手ほどき受けたので、福居先生のデカルトが、僕のデカルトのベースになっているわけです。僕のデカルトってほどデカルトについて学もないんですけども。そうすると、あくまでその限りの話ですけど、先ほど挙げられていた、「つつある」の解釈ですね。コギトを「つつある」と読んで、持続として読むっていうのは、福居デカルトベースの僕にとっては、むしろすんなり入る感じで、逆に引っかけからなかったんで、そう指摘されて、確かになるほどと思ったところはあります。一つははっきりしていることは、ベルクソンは連続創造説をすごく強く取ってるんですね。それは、もう『物質と記憶』から出てきていますので、もっと前からかな、ちょっとわかんないですけど、デカルトといえば連続創造ってほとんど紐づけて出てくるぐらい、瞬間の独立を考えていて、その中での因果性っていうのを考えているのは、恐らく、これはベル

クソンの影響を受けた福居先生の解釈の影響を受けた僕の解釈によるベルクソンではなくても、多分ベルクソンの中で言えそうなことなんですね。だから、ここでデカルトをそう読む、つまり連続創造でありながら、「思惟しつつある限りにおいて私は存在する」って、その「つつある」の部分に、瞬間の中だけでも持続を見る。それがベサードの解釈とフィットするっていうのは、これまた非常に面白い。デカルト研究は門外漢なわけですけど、ベサードのことをどうして知ってるかっていうと、彼がインスタントとモメントを区別してるんですよ。日本語だとどっちも普通は「瞬間」と訳されるんですけど、モメントっていうのは幅があるんですよ。理念的な瞬時じゃなくて、インスタントじゃなくてっていう。その概念がちょうどここで交わる、つまり、コギトが瞬間でありながら「つつある」の持続として成立しているっていう、持続としてのコギト解釈っていうのに、デカルト、ベサード、福居がつながるみたいな(笑)、そういう驚きというか感動がありまして、ちょっとまとまらないですけど。

○鈴木 普通は、つまりベルクソンの後ですけど、デカルト論争史だと、論争の対立項は、ベルクソンの意味での直観じゃない直観っていうことですよ。

○平井 そうですね。

○鈴木 「直観 対 推論」ですよ。それとは違うような。

○平井 もちろんベルクソンの持続とは違うと思うんですね。ベルクソンの持続はもう少し、持続する。もう少し持続っていうのも変ですけど、瞬間の中の持続ではないので、その意味でそうなんですけど、多分、でもそこにやっぱり「つつある」を読むっていうのは、ベルクソンとして非常にあり得る筋かなと思いました。あとは近世全般に対する鈴木先生の感想といえますか、評価は、これは僕も完全に同意といいますか、もう解説でもほとんど扱わなかったですけど。だからやっぱり、ライブニッツにしても、プロティノスがもう全部やってますと。ライブニッツの予定調和も個体概念も全部プロティノスがやってますと言って、プロティノスのところで、もうほとんどやるべきことをやっちゃって、最後にライブニッツが出てきたときにはもうやりましたよねって感じになってしまってるっていう、そういう扱いですし、デカルトに関してもそうで、スピノザの不在自体もそうですし、カントはおまけみたいな感じの扱いで、途端にトーンダウンしてて、ちょっと学期終わりで疲れたのかなっていう(笑)。

○一同 (笑)

○平井 感じがしないでもないか。まあメインディッシュはもうやったって感じの。あとさらっと近世っていう感じの扱いで、本当にその印象、実際内容的にもそうだと思います。特にライブニッツ解釈については、ほかのところも含めてなんですけど、おかしいぐらい教科書的ですよね。それについては、ちょっと僕は思うところがあって。例えば、さっきのまさに藤田

さんが引用してくださったベネデッティのところで、点の内部があるという話をして、それは「意図」であり、次へと移行しようとする意図なのだという話をしてるんですけど、これ、絶対ライブニッツが頭にあると思うんですよ。それをここ、もうベネデッティでやりましたからって感じで、先出ししちゃって、プロティノスとも一緒ですよ。予定調和は実はプロティノスがやっています。個体概念もやっていますって言って、下げてるんですけど、本当は多分ライブニッツじゃないかって、これはもう単なる邪推で何のテキスト的な根拠もないんですけど、それは強く思うところがあって。僕も一応ライブニッツについては、ちょっと常日頃思うところがあるので、何らか、彼の中で、何かライブニッツについては、あえて抑えてるぐらいの感じがすごくします。だからそこは本当に、この文字面を見ると、何でベルクソンともあろう人が、ほかのものについてはこれだけ読解しているのに、ライブニッツはこうなんだという。テキストははっきり読んでるんですね、さっき挙げられましたように、そういう細かいものはいっぱい読んでいて。でも、ほかの哲学者に対する読解の無双ぶりから考えると、ちょっとびっくりするぐらい保守的っていうのは本当にご指摘のとおりだと思います。

あとはそう、無限の扱いですね。これは『形而上学入門』の草稿が書かれた、講義の一年前、1902年の夏に脱稿してるんですね。そのあとの講義で、だからその最初の4章、4講義は『形而上学入門』よりもわかりやすいという。具体例に多く触れていて、かつ非常にストレートになってるっていうのはあって、それは本当にご指摘のとおりだと思いますね。その中で、いろいろベルクソンの対概念、絶対とか単純とかいろいろ挙げる中で、無限っていうのは確かに挙がってるんですけど、これは今までちゃんと確かに考えたことなかったなと思いましたね。絶対とか単純っていうのは、内包的に掘り下げて議論していくんですけど、無限自体は…。金貨の例とかは、何度も出てくるんですけどね、金貨を小銭にばらすと。無限と無際限に対応しているようなかたちで。ただ、確かに理論的な掘り下げとして、持続が無限であるという規定の仕方はあんまりされないということは考えなきゃいけない課題として、ベルクソンの研究として考えなきゃいけない。単純性とかは本当に何度も著述してるんですね。例えば、哲学者は同じ一つのことだけを考えていて、それは一生かけても語り尽くせないんだっていうようなかたちで、単純性の話もしますし。絶対っていうのも、外からの観察や比較による考証じゃなくて、中に入って云々という議論として出てくるわけなんですけど、無限そのものは、並べて出てくる割には、その概念的な掘り下げっていうのは言われてみると…。それがまさに空間論の欠如に対応してるんだっていう鈴木先生のご指摘はかなり深いんじゃないかと思います。ベルクソンの哲学にとっては。なので、三宅剛一との照らし合わせっていうのは非常に有用かもしれない。本当にありがとうございました。

○藤田 実は、この時間観念の歴史、おかげさまで好評で、そのうち2刷が出ます。そのときに少しなら直していいよと言われ、慌てて訳者4人でチェックしまして、第1講のいきなり第2段落目にもうすでに直しが入る予定です。26ページの2段落目の後ろから2行目、「にもかかわらず、絶対、相対、無限、完了、未完了といった語がうまく規定されず」というところの、「無限」が落ちていました。

○平井 意図的じゃないですけども（笑）、たまたま。

○藤田 絶対、相対、完了、未完了っていうその対の中で、何かこれだけ浮いちゃっててっていうところで抜けちゃったんですけど。まさにこれ、だから、ベルクソンの中でうまく扱いきれてなかったのかもしれないなというふうには思いましたね。本当に刺激的な議論をお二人ありがとうございました。

（以下、会場とのやり取り略）

○藤田 ありがとうございます。最後に杉山直樹先生からも何か一言いただけると。

○杉山 とてもよい仕事が出たなと思って、私、喜んでいます。ベルクソンの哲学史は『創造的進化』の4章で圧縮されたかたちでしか示されていなかったの。あれは、ゲルーでしたか。「俺様哲学史」だと。いろいろな哲学者たちがいたが、最後についに俺様ベルクソンが登場するという自己正当化の非常に悪質な哲学史だと。これが業界の中でも定説ではあったわけです。それが間違いだったという気はありません。けれども、もうちょっと興味を持てるものだったんだっていうのが、このコレージュ・ド・フランスでの講義で、われわれが思い知らされることであるわけです。やっぱり並の人間がする講義ではない。あの講義1年間で展開できる人間っていうのは、そうそういるものではないと思います。ですが、そうであるからこそ、専門家の方からまた話を伺って、かえってベルクソンの視野から離れたものについて考えることもできる。視野から落としたのか、それとも本当に見えないのか。これも情報なわけで、つまり「見えない」っていうのは何か一つベルクソンについて、本質的なことを教えているわけですね。そういった非常に喚起力のある講義録がこんなに読みやすいかたちで出たというのは、非常にうれしいことです。私、世界で一番優れたエディションが出たと思ってます。ほかの講義録の訳も続いて出るんですよね？

○一同 （笑）

○杉山 それだけ聞きしたい。この一冊だけで終わったらちょっと笑います、私は。何だったんだっていう。

そんなところで、私としては訳者の方々に本当にお礼を申し上げたいと思います。上から目線で失礼しました。

○藤田 ありがとうございます。みなさま、本日は3時間強にも及ぶ合評会にお付き合いいただき、本当にありがとうございました。講評をいただいたお二人の先生、平井さんにも感謝申し上げます。大変充実した会になったと思います。

### 付記（鈴木）

合評会の開催、そして、その活字が手元に届いてから、長い年月が経ってしまいました。刊行の遅れは一重に鈴木個人の事情によるものです。また、本来であるなら、語られるべきことを追加修正すべきであると思いますが、合評会当日の記録を残すという第一の目的とこれ以上の刊行の遅延は許されないということを考え、最小限の修正と圧縮に留めました。合評会の開催から記録の保存に至るまで、文字通りお世話になり、またご面倒をおかけした藤田・平井の両氏に深く感謝し、かつお詫びするとともに、忍耐強くお待ちくださった納富氏に感謝します。

### 注

- 1 本学部教員
- 2 第二弾は、2019年12月22日に北海道大学で開催された北海道哲学会・北海道大学哲学会の合同研究会において「ベルクソン『時間観念の歴史 コレージュ・ド・フランス講義1902-1903年度』（書肆心水）日本語版刊行記念合評会——アリストテレス、カント、19世紀フランス哲学をめぐって」として実施された。その記録の一部は、北海道哲学会編『哲学年報』第67号（2021年9月）に三浦洋氏（北海道情報大学）の論考「古代思想とベルクソンの時間論——第5～14講について」（1-6頁）と藏田伸雄氏（北海道大学）の論考「カントの立場からのコメント」（7-9頁）として掲載されている。  
第三弾は当初京都大学で開催される予定だったが、コロナ禍の影響を受けて延期され、最終的に2020年11月21日にオンラインで開催された。その記録は二回に分けて、平井靖史・青山拓央・岡嶋隆佑・藤田尚志・森田邦久「ベルクソンと現代時間哲学（上）」、福岡大学人文学部編『人文論叢』第53巻第2号（2021年9月）495-528頁および「ベルクソンと現代時間哲学（下）」、『人文論叢』第53巻第3号（2021年12月）941-969頁として公開されている。
- 3 Cf. 藤田尚志『ベルクソン 反時代的哲学』（勁草書房、2022年）、第Ⅱ部第1章「『アリストテレスの場所論』に場所を与える」、189-216ページ。
- 4 「神的実在の衰退した表現に他ならないものとしての天球の円運動を指定すれば、魂と、その魂のうちへと入り込む思考を指定せざるをえず、したがってまたその思考による数え上げ、そしてそれゆえに時間をも指定せざるをえません。その結果、時間は、魂が存在する限りでしか存在せず、また私たちが規定してきた範囲において、つまりその魂の思考によってしか存在しないのではありますが、絶対的な必然なのです」（『時間観念の歴史』164ページ）。
- 5 Camille Riquier, *Archéologie de Bergson. Temps et métaphysique* (2009), PUF, coll. « Quadrige », 2021, p. 216.
- 6 Riquier, *op.cit.*, p. 544.
- 7 Hisashi Fujita, "Sublime and Panoramic Vision. Bergson, Kant and Heidegger on Schematism," (*Bergsonian* no. 3: Nothigness and Intuition. Bergsonism in East-Asia, July 2023, pp. 165-193. <https://doi>

org/10.4000/bergsoniana.1512) の第三節「Transcendence and Turn (tournant), two forms of violence」を参照のこと。Cf. 「しかし、まだ試みるべき最後の企てがあるはずだ。それは、経験を探し求めてその源泉にまで赴くこと、あるいはむしろ、経験がわれわれにとっての有用性の方向に向きを変えながらまさに人間的な経験となる、その決定的な転回点のさらに向こう側に赴くことであろう」(MM 205)。